



新書
重罪去
三

第三章の重罪裁判所を為す所又手續

第二百九十一條の重罪取調局は、被告入重罪

ヲ犯シタリト告ル下ヲ言渡シタル時、上等裁

判所所在ノ地ニ重罪裁判所ヲ設ケ、其ノ裁

定ハ、刑ノキレトシ、ルセ子ラシナ命ニテ、二十四

時間ニ、然テ訴ニ管スル書類ヲテ、ハル下ニ

ノ首府ニアル下等裁判所ノ書記局即チ重罪

裁判所ノ書記局ニ送り、又ハ其刑段指示シタ

ル下等裁判所ノ書記局前同ニ送り、送ル可シ、

如何ナル場合ニ於テモ、下吟味ヲ為シタル裁

判所ノ書記局ニ遺シ置キ、又ハ上等裁判所ノ
書記局ニ差出シタル犯罪ノ證書類ヲ同一ノ
期限内二十四時ニ前項ニ記シタル書記局ニ
送ル可シ

第二百九十二條ノ前條ニ記シタル二十四時ノ
期限ハ、被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キ重罪
取調局ノ言渡書即チ重罪ヲ犯シタルヲ被告人
ニ送りタル時ヨリ之ヲ算ス可シ

被告人既ニ獄舎ニ繋カレタル時ハ、右二十四
時ノ期限内ニ重罪裁判所附ノ獄舎ニ其被告
人ヲ移ス可シ

○ 第二百九十三條ノ書記局ニ書類ヲ送り且被告
人ヲ重罪裁判所附ノ獄舎ニ移シタル時ヨリ
遅クトモ二十四時間ニ重罪裁判所ノ上席人
又ハ上席人ヨリ別段任ヲ受ケタル裁判役其
被告人ヲ問死ス可シ

第二百九十四條ノ被告人ハ自己ノ為メ辯論ス
可キ代言人ヲ撰ミタルヤ否ノ問ヲ受ケ、若シ
之ヲ撰マサル時ハ裁判役直チニ代言人一名
ヲ撰ム可シ、但シ代言人ヲ撰ムトナクシテ為

レハル諸件ハ其効ナカル可シ

然レ氏被告ノ後ニ自カラ代理人ヲ撰ミタル時ハ裁判役ノ為シタル代理人撰用ヲ取消ス可シ但シ此場合ニ於テハ裁判役ヲ為シタル代理人撰用ヲ取消スト雖モ其撰用ヲ得タル

第二百九十五條○被告人ノ代理人ハ本人自カラ撰用スルト裁判役ノ撰用スルトヲ問ハス

第上[○]等裁判所又ハ其管轄地内ノ代理人若クハ代書師ヲ用フ可シ但シ被告人重罪裁判所ノ

第上席人ヨリ已ニ親族又ハ朋友中ノ一人ヲ代言人ト為ス可キ允許ヲ得タル時ハ格別ナリ

第二百九十六條○重罪裁判所ノ上席人又ハ上席人ヨリ別段任セラレタル裁判役ハ被告人

若シ重罪取調局ノ言渡人取消ヲ願ハント欲セハ五日内ニ其旨ヲ届ク可ク若シ其期限

ニ之ヲ届ケサル時ハ其取消ヲ願フ可キノ權ヲ失フ可キ旨ヲ告ク可シ

此條ニ記スル所及ヒ前二條ニ記スル所ヲ執

行フタル事ハ之ヲ調書ニ記シ、被告人裁判役
書記官皆之ニ姓名ヲ手署ス可シ、若シ被告人
姓名ヲ手署スルヲ知ラス又ハ之ヲ肯セサ
ル時ハ調書ニ其旨ヲ附記ス可シ、

第二百九十七條〇若シ被告人前條ニ循ヒ裁判
役ヨリ告知ヲ受タルヲナキ時ハ五日以上ノ
時間重罪取調局ノ言渡ヲ取消ス可キ旨ヲ届
ルヲナシト虽モ其届ヲ為ス可キ権ヲ失フ
ナク重罪裁判所ノ確定ノ裁判言渡アリテ後
ニ至リ其権ヲ行フヲ得可シ、

第二百九十八條〇アロキユリトシセ子育進出亦
被告人向ル時ヨリ五日以内重罪取調局ノ
言渡ヲ取消サシトスル届ヲ為ス可ク、若シ之
業ヲ為サシ時ハ第二百九十六條ノ記スル如
ク其権ヲ失フ可シ、

第二百九十九條〇今八百五十二年第六月十日
左ノ如ク改シ重罪取調局ノ言渡即チ被告人
可キ言渡ヲ取消サシトスルハ左ノ場合ニ
限ル可シ、

第一〇裁判所管轄ノ異ナル時

第二〇被告人ノ申立ラレシ所為ヲ法律上

ニテ重罪ト為サレシ時

第三〇司ニステイルロビブリクノ申立ラ聴

カサリシ時

第四〇法律上ニ定メタル負數ノ裁判役其

言渡ヲ為サレシ時

第三百條〇重罪取調局ノ言渡ヲ取消サントス

届書ハ書記局重罪裁ニ出ス可シ

書記官其届書ヲ受取リタル後直チニ上等裁

判所ノプロキユリトルゼチラレヨリ重罪取調

局ノ言渡書ノ寫ヲ覆審院ノプロキユリトルゼ

チラレニ送り覆審院ニ於テハ他事ヲ差置キ

先ツ其取消願ヲ裁判ス可シ

〇第三百一條〇千八百五十三年第六月十日左ノ

如ク改シ重罪取調局ノ言渡ヲ取消サント願

出シタルニ管セス重罪裁判所ニテ公ケノ吟

味即チ被告人証人原告ニ至ル迄ノ手続ヲ為

ス可シ但シ其吟味ハ暫ク之ヲ延ス可シ

然レモ第二百九十六條ニ記シタル期限ノ終

リシ後其取消ノ願ヲ為シタル時ハ其願ニ管

セズ重罪裁判所ニテ公ケル吟味ト裁判トニ
取掛ル可シ。○此場合ニ於テハ重罪裁判所ノ
確定ノ裁判言渡アリレ後ニ非サレハ其取消
ノ願並ニ其願ヲ為スニ付テノ憑據ヲ覆審院
ニ差出ス可カラス。

又其他如何ナル原由アルヲ問ハス然テ法律
上ニ定メタル期限ノ終リレ後又ハ其期限内
ト魚氏陪審ノ姓名ヲ圖引ニ為シタル後ニ申
出シタル裁判言渡取消ノ願ハ此條ニ記スル
如クタル可シ。

第三百二條○被告人ノ代理人ハ被告人ノ問ハ
後之下面談スルコトヲ得可シ。○馬取ヲ
又其代理人ハ然テハ證書類ヲ檢視スルコト
得可シ但シ是力為ル其證書類ヲ他所ニ移シ
又ハ吟味ノ手續ヲ遅延スルコトヲ得可シ。
○第三百三條○更ニ新ナル證人ヲ問ハス可キ時
其証人重罪裁判所ノ管轄外ニ住居スルニ於
テハ其上席人又ハ上席人ニ代ヒ可キ裁判役
其証人住居ノ地ノ下吟味掛リ裁判役又ハ其
他ノ地ノ下吟味掛リ裁判役ヲ任シ其申述ヲ

聽カシム可シ。○其下吟味掛リ裁判役其申述ヲ聽キタル上ニテ之ヲ書面ニ記シ封印ヲ爲シテ重罪裁判所ノ書記官ニ送ル可シ。

第三百四條○重罪裁判所ノ上席人又ハ之ニ代ル裁判役ノ呼出ヲ受ケ出席セサル證人正當ノ差支アリシ証ヲ立テサル時又ハ其証人出席スルト由テ証ヲ申述フルヲ肯セサル時ハ重罪裁判所ニテ吟味ヲ受ケ第八十條ニ循ヒ罰ヲ受ク可シ。

第三百五條○被告人ハ其事件ニ管スル證書類ノ中ニテ有益ナリト思料スルモノヲ自己ノ費用ヲ以テ寫取リ又ハ寫取ラレタリ得可シ。又罪犯罪證ヲ立ル調書及ヒ証人ノ申述書ハ又被告人ノ數如何ニ多キヲ問ハズ無税ニテ其寫一通ヲミヲ渡ス可シ。

上席人裁判役ノ口キユルルゼ子ラ此ハ此條ハ規則ノ如ク執行ヲ可キトニ注意ス可シ。第三百六條○若シテ口キユルルゼ子ラ此又ハ被告人陪審人最初ノ會議ニテ其事件ヲ審判

ヲ受クルコトヲ欲セサル原因アル時ハ重罪裁
判所ノ上席人ニ延期ノ願書ヲ差出し其上席
人延期願ヲ允許不可キヤ否ヲ決定ス可シ又
其上席人ハ自己ノ公務ヲ以テ其延期ヲ言渡
スコトヲ得可シ

第三百七條〇一箇ノ罪犯ニ付キ被告人數人ニ
對シ重罪告訴狀數通アル時ハ判口キユル
セ子ラシ其數箇ノ訴ヲ合ス可キノ求メ為ス
コトヲ得可シ又裁判所ノ上席人ハ自己ノ公務
ヲ以テ其事ヲ言渡スコトヲ得可シ

第三百八條〇若シ一通ノ重罪告訴狀ニ五ニ附
帶セザル罪犯數箇ヲ記シタル時ハ判口キユル
コトヲ得可シ又當時其罪犯中ニテ特ニ定
メタル一箇又ハ數箇ノミヲ裁判ス可キコトヲ
求ムルヲ得可シ又裁判所ノ上席人ハ自己ノ
公務ヲ以テ其事ヲ言渡スコトヲ得可シ
第三百九條〇重罪裁判所ノ會議ヲ開ク日ニ至
リ裁判役列坐シタル上ニテ陪審十二名圍列
ノ順序ニ從ヒ來聽人ノ席原告被告ノ席証人
ノ席ト離レ被告人ト相對シテ席ニ就ク可シ

第四章○吟味ノ事、裁判言渡ノ事、裁判言

渡、如ク執行ノ事

第一款○吟味ノ事

第三百十條○被告ノハ逃亡ヲ防ク為メ、番卒

真ニ押送セラレ、縛ヲ受クルトナク、裁判所ニ

出ツ可シ○被告ノ出席、上裁判所、上席人

ヨリ、其姓名、年齢、職業、住所、出産ノ地ヲ問フ可

シ

第三百十一條○上席人ハ被告ノ代理人ニ其

本心ヲ背キ、詞ヲ虚設シ、又國ノ法律ヲ

慢侮シ、詞ヲ奏ス可カラズ、禮節謙退ノ道ヲ

守リ、辨論ス可キトテ、告ク可シ

第三百十二條○倍審皆、帽ヲ脱シ、立テ並ニタル

上ニテ、上席人倍審ニ向テ、左ノ語ヲ述フ可シ

汝等此度被告ノ某ヲ受テタル罪犯申立テ

懇切ニ注意シテ、審加ニ取調ベ、被告ノ權

利並ニ其罪犯ヲ申立タル國民ノ權利ヲ損

害スルトナク、且汝等決断ヲ為スニ至ル迄

人ト詞ヲ參テ、可カラズ、愛憎畏懼ノ心ヲ

生ス可カラズ、悉サニ罪犯ノ告訴ト被告ノ

答辨トテ聴キ以テ自主ノ權アル正直ノ人ニ適スル公平誠實ノ意ヲ以テ汝等ノ本心ト汝等ノ確知スル所トニ從ヒ決断ヲ為ス可キ事ヲ天ト人トニ對シ盟約ス可シ
上席人此語ヲ述ヘ終リタル後倍審ヲ一人毎ニ其面前ニ呼寄セ然ル後倍審ヲ擧ケ余之ヲ盟フト答フ可シ但シ此等ノ法式ヲ為サ
ル時ハ倍審ノ決断ノ効ナカル可シ

第三百十三條○此式ヲ為シ終リタル後上席人ヨリ被告人ニ其聴ク所ノ事ニ注意ス可キトヲ告ク可シ

然ル上ニテ上席人書記官ヲシテ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス重罪取調局ノ言渡書ト重罪告訴狀トヲ讀主クシム可シ
書記官ハ高声ニテ之ヲ讀上ク可シ

第三百十四條○其讀上ノ濟ミタル後上席人更ニ被告人ヲシテ重罪告訴狀ニ記スル所ニ注意セシメ然ル後被告人ニ是即チ汝ノ告訴セラル所ナリ之ヨリ後其罪犯ハ証ノ申述ヲ聴ク可シト告ク可シ

第三百十五條の「プロキユールゼ子ラ止ハ更ニ
告訴、旨趣ヲ辨明シタル上ニテ自己ノ求メ
又ハ民事原告人ノ求メ又ハ被告人ノ求メニ
因リ同糺ス可キ證人ノ姓名目録ヲ差出ス可
シ」

書記官高声ニ其目録ヲ讀上ク可シ

其目録ニハ、証人吟味ヨリ少クトモ二十四時

前「プロキユールゼ子ラ止又ハ民事ノ原告

人ヨリ被告人ニ姓名職業住所ヲ告知シタル

証人又ハ被告人ヨリ「プロキユールゼ子ラ止

ニ姓名、職業住所ヲ告知シタル證人ノ目録

不可シ但シ第二百六十九條ニ循テ裁判所上

席人ヲ呼出サントスル證人ハ例外ナラトテ

被告人及ヒ「プロキユールゼ子ラ止ハ告知書

ニ全ク姓名ヲ記セサル證人又ハ其姓名ヲ記

スルト雖モ職業住所等總テ其人ヲ知り得可

キ諸件ヲ詳カニ記セサル證人ノ同糺ニ付キ

故障ヲ述ハルヲ得可シ

其故障ヲ申述ハ即時ニ裁判所ニテ審判ス可

第三百十五條の「プロキユールゼ子ラ止ハ更ニ

第三百十六條○上席人ハ証人ニ別段指定メタル室ニ退ク可キヲ命ス可シ○證人ハ其証ヲ申述ル時ニ非サレハ穢リニ其室ヲ出ツ可カラス○上席人巴ムヲ得サル事情アル時ハ証人等ヲシテ其証ヲ述フル前ニ罪犯ノ事並ニ被告人ノ事ニ付キ互ニ談話スルヲ防ク為メノ處置ヲ為ス可シ

第三百十七條○証人等ハ口口キユリルゼ子ヲ此ノ定メタル順序ニ從ヒ各自ニ其証ヲ申述ス可シ○証人ハ証ヲ述フル前ニ愛憎畏懼ノ心ナク正實ヲ述ヘ正實ノ外述ヘザル可キ誓ヲ為ス可シ若シ其盟ヲ為サレバ其申述ヘタル証ノ効ナカル可シ

上席人ハ証人ニ其姓名年齢職業住所ヲ問ヒ又被告人ノ告訴サレタル罪犯ノ前ヨリ其被告人ヲ知リタルヤ否ヲ問ヒ又被告人或ハ民事原告人ノ血族ナルヤ姻族ナルヤ若シハ血族姻族ナレハ何級ナルヤヲ問ヒ又被告人或ハ民事原告人ノ使用ヲ受クル者タルヤ否ヲ問ヒ又此問ヒ濟ミタル上証人口上

ニテ證ヲ述フ可シ

第三百十八條○上席人ハ書記官ヲシテ嘗テ証

人ノ申述ヘシ所ト現ニ其申述ル所トノ差異

増加ヲ書取ラシム可シ

又「プロキユリユールゼ子ラヒ及ニ被告人ハ其差

異増加ヲ書取ラシムルヲ上席人ニ求ムル

ヲ得可シ

第三百十九條○證人証ヲ述ヘ終リタル後上席

人ヨリ証人ニ其述フル所ハ現ニ其席ニ在ル

被告人ニ管シタル相違ナキヤヲ問ヒ然ル後

被告人ニ證人ノ述フル所ハ罪犯ノ証ニ答辨

セシト欲スルヤ否ヲ問フ可シ

証人其証ヲ述フル間ハ他ヨリ詞ヲ參フ可カ

ラス被告人及ニ其代言人証人ニ問ハント欲

スル事アラハ証人ノ其証ヲ述ヘ終リタル後

之ヲ上席人ニ願ヒ証人ニ問ハシム可シ然ル

上ニテ被告人又ハ其代言人其証人ニ付キ並

ニ其申述ヘタル罪犯ノ証ニ付キ自己ノ權利

ヲ護スルニ有益ナリト思料スル所ヲ述フル

ヲ得可シ

上席人の事實ヲ明白ナラシムル為ノ必要ナ
リト思フ所ノ諸件ヲ自己ノ職務ヲ以テ証人
ト被告人トニ問フコトヲ得可シ
又裁判役「プロキユリユール」セ子ラ止「倍審」ハ上席
人ノ許ヲ得タル上ニテ、全上ノ諸件ヲ証人ト
被告人トニ問フコトヲ得可シ○民事ノ原告人
ハ其問ハント欲スル事ヲ上席人ニ願ヒ問ハ
シム可シ

第三百二十條○各證人ハ其証ヲ述ヘ終リタル
ヨリ陪審其決斷ヲナス為メ吟味ノ席ヲ退ク
ニ至ル迄其席ニ留ル可シ但シ上席人ヨリ之
ニ及シタル言渡ヲ為シタル時ハ格別ナリト
ス

第三百二十一條○「プロキユリユール」セ子ラ止又ハ
民事原告人ヨリ出シタル証人ノ申述濟ミタ
ル後被告人ハ告訴狀ニ記シタル罪ヲ犯サ
ル、証ヲ立ル為メ又ハ「廣直」ニテ行狀正シク
名譽ヲ失ハサル人タルノ証ヲ立ル為メ其出
シタル証人ヲシテ証ヲ述ヘシム可シ
被告人ハ已レノ求メニテ證人ヲ呼出シタル

費用ト其証人謝金ヲ得ント求ムル時ハ其謝
金トテ擔當ス可シ但シ口キユルゼ子ラ
止被告人ノ申立シ証人ヲ呼出ス時ハ事實ヲ
分明ナラシムルニ有益ナル可シト思料シ自
カラ之ヲ呼出シタル時ハ格別ナリトス

第三百二十二條〇左ノ証人ノ申述ハ之ヲ聽ク
可カラス

第一〇被告又ハ共ニ吟味ヲ受クル被告
人中一人ノ父母祖父母又ハ其他ノ尊屬
親

第三〇子女孫男孫女又ハ其他ノ卑屬ノ親

第三〇兄弟姉妹

第四〇前ニ記スル一府ノ者ト同級ノ姻族ノ
親

第五〇既ニ離婚シタルト否トテ問ハス夫
又ハ婦

第六〇罪犯ヲ申立ルニ付キ法律上ニテ給
料ヲ受クル者

然レモ此等ノ証人ヨリ証ヲ述フル時口キユ
ルゼ子ラ又ハ民事ノ原告又ハ被告

人其証ヲ述フルニ付キ故障ヲ申立ニテサルニ
於テハ其証申述ノ効アリトス

第二百二十三條の罪犯ヲ申立ルニ付キ法律上
ニテ給料ヲ受ケサル罪犯申立人ハ其証ヲ申
述フルコトヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ其証
人罪犯ノ申立テ人タルコトヲ倍審ニ告知ス可
シ

第二百三十四條の刑口キユールセ子ラ止又ハ
被告人ノ差出シタル証人第二百十五條ニ記
シタル姓名目録申ノ者タル時ハ縱令預メ書
面ヲ以テ其証ヲ申述ヘタルコトヲ又ハ別段
呼出ヲ受クルコトナシト虫氏吟味ノ席ニテ其
申述ヲ聴ク可シ

第二百二十五條の凡ソ証人ハ之ヲ差出セシ者
ノ何人タルテ問ハス互ニ問糾ヲ為ス可カラ
ズ
○ 第二百二十六條の被告人ハ証人等ノ証ヲ述ヘ
終リタル後其別段指示ス所ノ証人ヲ一度吟
味ノ席ヨリ退カシメ其後更ニ一人毎ニ出席
シテ其証ヲ述ヘシメ或ハ数人相對シテ其証

ヲ述ヘシムルヲ求ムルヲ得可シ
アロキユリユールゼ子ラルモ亦同一ノ権アリ
又上席人ハ自己ノ職務ヲ以テ之ヲ言渡ス
ヲ得可シ

第三百二十七條の上席人ハ証人ノ申述ヲ聴ク
前後又ハ之ヲ聴ク間ニ被告人中一人又ハ数
人ヲ吟味ノ席ヨリ退カシメ罪犯ノ模様ニ付
キ別席ニテ之ヲ吟味スルヲ得可シ然レモ
各被告人ニ其席ニ居ラサル間為シタル所ノ
諸件ヲ詳カニ告知シタル上ニ非サレハ更ニ

総体ノ吟味ニ取掛ル可カラス

第三百二十八條の証人吟味ノ間倍審アロキユリ
ルゼ子テハ裁判役ハ証人ノ申述又ハ被告
人ノ答辯ノ申ニテ入用ナリト思料スル諸件
ヲ書取ルヲ得可シ但シ之ノ力為メ辯論ノ妨
ヲ為ス可カラス

第三百二十九條の証人ノ証ヲ申述スル時間又
ハ之ヲ申述ヘタル後上席人ヨリ罪犯ノ憑據
タル可キ諸物件ヲ被告人ニ示シ被告人ヲシ
テ之ヲ認ルヤ否ヲ自カニ答ヘシム可シ又上

席人ハ別段ノ道理アル時物件ヲ証人ニモル
ス1ヲ得可シ

第三百三十條〇若シ吟味ノ上証人ノ述フル所
全ク偽タル可シト思ハル、時ハ上席人何レ
キユエールゼ子ラルノ求メニ因リ又ハ民事ノ
原告人或ハ被告人ノ求メニ因リ又ハ自己ノ
職務ヲ以テ直チニ其証人ヲ召捕ヘシム可シ
〇此場合ニ於テハ何レキユエールゼ子ラル司
法警察官吏ハ職ヲ行ヒ上席人又ハ上席人ヨ
リ別段任シタル裁判役下吟味掛リ裁判役ノ
務ヲ行フ可シ其裁決所時又裁決ス可シ
下吟味ヲ為シ終リタル上ニテ総テノ書類ヲ
上等裁判所ノ重罪取調局ニ送り其局ニ於テ
其証人ノ重罪犯ヲ告ク可キヤ否ヲ裁決ス可
シ

第三百三十一條〇前條ノ場合ニ於テハ何レキユ
エールゼ子ラル又ハ民事ノ原告人又ハ被告
人ヨリ直チニ重罪裁判所ノ次ノ會議ノ日ニ
吟味ヲ延ハス可キヲ求ムルヲ得可ク又裁
判所ヨリ公務ヲ以テ之ヲ言渡ス1ヲ得可シ

第三百三十二條の若シ被告人ト証人ト互ニ其
言語ノ相通セサル時ハ上席人其職務ヲ以テ
二十一歳以上ノ通辯人ヲ任シ且其通辯人ヲ
シテ互ニ異ナリタル言語ヲ用フル者ノ述
ル所ヲ正実ニ譯解ス可キノ誓ヲ為サシム可
シ若シ此等ノ規則ニ背ク時ハ其通辯シタル
諸事ノ効ナカル可シ
被告人及七カロキユリールゼ子ラレハ通辯人
ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ但シ其故障
ノ申述書ニハ其旨趣ヲ記ス可シ

其故障ノ申述ハ裁判所ニテ裁決ス可シ
証人裁判後倍審ハ縦令カロキユリールゼ好
止及ヒ被告人ノ承諾アリトモ虫氏通辯人トナ
ル可カラス若シ此等ノ者通辯ヲ為ス時ハ其
通辯シタル諸事ノ効ナカル可シ
第三百三十三條の若シ被告人聲啞ニシテ且文
字ヲ書スルヲ知ラサル時ハ上席人平生被
告人ト応接スルニ慣熟セシ者ヲ撰テ言語ヲ
通セシム可シ
證人聲啞タル時モ亦之ニ等シトス

其他此條ニ記スル所ニ付キ前條ノ規則ヲ通
ニ用フ可シ

聾啞者文字ヲ書スルコトヲ知ル時ハ其者ヘノ
問糾及ヒ上席人ヨリ注意セシムル諸件ヲ書
記官書面ニ記シテ之ヲ示シ其聾啞者亦其返
答ヲ書面ニ記シテ差出ス可シ○書記官ハ總
テ此等ノ書面ヲ讀上ク可シ

○第三百三十四條○被告人数人アル時ハ上席人
最初吟味ヲ受ク可キ者ヲ定ム可シ但シ其数
人ノ中罪犯ノ主者アル時ハ最初ニ之ヲ吟味ス
可シ

其他ノ被告人ハ各自次第ニ吟味ヲ受ク可シ
第三百三十五條○証人等證ヲ述ベ終リ且其申
述ニ付キ辯論アリシ後民事ノ原告人又ハ其
代言人及ヒ刑口キユリルセ子ラ止罪犯告訴
ハ憑據ヲ辨ス可シ

被告人又ハ其代言人ニ答フ可シ
民事ノ原告人及ヒ刑口キユリルセ子ラ止ハ
更ニ之ニ答フルコトヲ得可シ然レハ辯論ノ終
ニハ被告人又ハ其代言人必ス詞ヲ發ス可シ

然ル上ニテ上席人吟味ノ畢レル旨ヲ言渡ス
可シ

第三百三十六條○上席人吟味ノ上明白トナリ
タル諸件ヲ簡略ニ書面ニ記ス可シ

上席人ハ有罪ノ重立タル証又ハ無罪ノ重立
タル証ヲ倍審ニ告ク可シ

是レ即チ前項ニ記
スル簡畧ノ
據ル所
ナリ

其後上席人ハ倍審ヲシテ其職務ニ注意セシ

上席人ハ後ノ數條ニ記スル如ク陪審ニ問

第三百三十七條○重罪告訴状ニ記スル罪犯ニ

被告人ハ告訴状ノ拔書第一條見合ニ記シ

タル模様ニテ云々ノ殺害云々ノ盜奪云々

重罪ヲ犯シタルヤ

第三百三十八條○吟味ニ因リ告訴状ニ記シタ

ル以外ノ罪ヲ重クス可キ模様アルコトヲ知リ

タル時ハ上席人左ノ問ヲ加フ可シ

被告人ハ云々ノ模様ニテ重罪ヲ犯シタル

第三百三十九條○被告人其罪犯ニ付キ法律上

ニテ救宥ヲ得可シト為ス事情アルトテ申述

ヘタル時ハ上席人左ノ如ク陪審ニ問フ可シ

若シ上席人此規則ニ背ク時ハ其問ノ効ナカ

ル可シ刑法第三百二十一條見合

其事情相違ナキヤ

第三百四十條○若シ被告人ノ年齢十六歳以下

ナル時ハ上席人左ノ如ク陪審ニ問フ可シ若

シ此規則ニ及ク時ハ其問ノ効ナカル可シ刑法

第三百四十條見合

被告人若シ犯罪ヲ犯シテ故意ヲ以テ為シ

第三百四十一條○(平八百五十二年)第六月九日

左ノ如ク改メ總テ重罪ニ付テハ初犯ト再犯

トテ論セズ上席人陪審ニ告訴状ニ記スル所

ハ問テ為シ又ハ吟味ニ因リ知リタル所ニ問

テ為シタル後陪審ノ全頁中其過半被告人ノ

為シ罪ヲ輕ク不可モ模様アリト思ハズ左ノ

如ク申立テ可キ者ヲ陪審ニ告ク可シ若シ此

規則ニ背ク時ハ其問ヲ効ナカル可シ
倍審全負ノ中過半ノ説ニテ被告人ノ為メ
罪ヲ輕クス可キ模様アリトス
此問ヲ為シタル後上席人数箇ノ問ヲ書面ニ
記シ之ヲ倍審長ニ渡ス可シ但シ重罪告訴状
罪犯ガ証ヲ立ル調書及ヒ其他証人ノ申述書
等ヲ除ク外總テ訴訟ニ管シタル書類モ亦之
ニ添ヘ渡ス可シ
上席人ハ倍審ニ秘密ハ投票ヲ以テ決断シ為
第百三十四條
次ニ上席人ハ被告人ヲ吟味ノ席ヨリ退カシ
ム可シ

第三百四十二條○上席人ヨリ倍審ニ問ヲ為シ
且其問ヲ記シタル書面ヲ渡シタル上ニテ倍
審其室ニ退キ高議ス可シ
陪審ノ姓名ヲ闡列ニ為シタル時最モ先ニ姓
名票ノ出テタル者ヲ倍審ノ長ト為シ又ハ其
者兼諾ノ上ニテ陪審全負ノ別段指定メタル
者ヲ以テ其長ト為ス可シ
陪審高議ヲ為シ始ムル前ニ其長左ノ心得書

ヲ讀上ク可シ但シ其心得書ハ大字ニ記シテ
室内ノ最モ著シキ場所ニ張出シ置ク可シ其

文左ノ如シ

凡^{ニ於テ}法律ハ倍審ノ確的ト為ス憑據如何ヲ
論スル^ルナク又微証ノ完備ニテ信據ス可
キヤ不^ルヲ試ミ識ル可キ規則ヲ定ムル^ルナ
シ唯倍審ハ罪犯ノ証及ヒ被告^人ノ答弁ニ
付キ其是非曲直如何ヲ靜默沈思シテ自カ
ラ之ヲ己ニ問ヒ且其本心ニ從テ決断ス可
シ○法律ハ倍審ニ對シ証人幾許ハ述^テル

其^レ所^レ正實ト為ス可シト定メ命^スル^ル非^ズ

又^ハ之^レ々ノ調書之^レ々ノ証書之^レ々ノ証人^之々

審^ハ微憑ニ據ラサル証ヲ正實ト為ス可カラ

第^ニ下^ニ定メ命スルニ非ス唯其^中如何ニ思

ヒ定ムルヤト云フ^ラ問フ而已トス是レ則

チ倍審ノ職務ノ要領ナリ

倍審ノ着意セサルヲ得可カラサル要件ハ

其商議スル所固ト罪犯告訴狀ノ事ニ管ス

ルニ固リ其職務告訴狀ニ記スル條件並ニ

之ニ附帶シタル條件ノコトヲ議ス可キニ在

テ若シ其決断ヲ為シタル上被告刑法ノ規
則ニ循ヒ如何ナル處置ヲ受ク可キヤ預メ
之ヲ思慮スルカ如キハ即チ其最要ノ職務
ニ背クモノトス夫レ倍審ノ職ハ罪犯ヲ告
訖スルニ非ス又之ヲ罰スルニ非ス唯被告
人ノ罪ノ有無ヲ決断スルニ過キサル而已
第三百四十三條○倍審ハ其決断ヲ為シタル後
ニ非サレハ其室ヲ出ルト得ス
又如何ナル原由アリト雖モ上席人ヨリ允許
ノ書面ヲ得タル上ニ非サレハ倍審ノ高議中

其室ニ入ル可カラズ
上席人ハ裁判所ニ属シタル倫警兵ノ長ニ倍
審ノ室ニ人ヲ出入スルヲ制ス可キ命令書ヲ
渡ス可シ但シ其兵長ノ姓名官位ハ其命令書
ニ附記ス可シ
此命ニ背キタル倍審ハ五百「フランク」ヨリ多
カラサル罰金ヲ裁判所ヨリ言渡サル可シ
倍審ヲ除クノ外総テ此命ニ背キタル者又ハ
此命ノ如ク執行ハシメサル者ハ二十四時間
禁錮ノ刑ニ處セララル可シ

第三百四十四條○倍審ハ先ツ主タル事件ヲ商議シ次ニ之ニ附帶シタル模様ヲ商議ス可シ

第二百四十五條○(千八百三十五年第九月九日

左ノ如ク改シ倍審ノ長弟三百三十六條ニ記

シタル如ク上席人ノ為シタル問ノ書面教通條

ノ次第ニ讀上ケタル後倍審等犯罪告知ノ主

タル箇條並ニ罪ヲ輕クス可キ模様及ヒ罪ヲ

重クス可キ模様ニ付キ秘密ノ投票ノ以テ決

断ヲ為ス可シ

第三百四十六條○(千八百三十五年第九月九日

左ノ如ク改シ又第三百三十九條及ヒ第三百

四十條ニ記シタル場合ニ於テ上席人ノ為シ

タル問目付テモ亦前條ニ記スル如ク處置ヲ

為シ且秘密ノ投票ヲ以テ決断ス可シ

第三百四十七條○(千八百五十三年第六月九日

左ノ如ク改シ倍審被告人ヲ有罪ナリト為ス

決断又ハ罪ヲ輕クス可キ模様ノ有無ニ付テ

ノ決断ハ全負中其半以上ノ投票ニ因リ之ヲ

為ス可シ○其決断書ニ附シテ可トセシ者ノ

数ヲ記スルハナク唯全負ノ半以上之ヲ可ト

スル者ヲ記ス可シ但シ此條ヲ記スル所ノ規
則ニ背キタル時ハ其決断ノ効ナカル可シ

第三百四十八條○次ニ倍審再ニ吟味ノ席ニ来
リ其座ニ就ク可シ

然ル時上席人ヨリ其決断如何ヲ問フ可シ
倍審ノ長立上リ其心職ノ上ニ手ヲ置テ左件

ヲ述フ可シ

我面目及ヒ本心ニ後ヲテ天ト人トニ誓ヒ

陪審ノ決断ハ然リ被告人ニ之々罪有ル又

然ラス被告人ニ之々罪無キ

第三百四十九條○倍審ノ決断書ハ陪審全員ノ

面前ニテ其長之ニ姓名ヲ手署シ且之ヲ上席

人ニ渡ス可シ

上席人ハ自カラ之ニ姓名ヲ手署シ且書記官

ヲシテ姓名ヲ手署セシム可シ

第三百五十條○倍審ノ決断ハ之ヲ取消サント

訴フ可カラス

第三百五十一條○(千八百三十一年)五月四日

廢ス

第三百五十二條○(千八百五十三年)第六月九日

左ノ如ク改ム倍審被告人ヲ罪有リト決断シ
タル時裁判所ニテ倍審法式ニ違フナシト
雖モ本案ニ付キ錯誤シタルヲ確知シタルニ
於テハ裁判言渡ヲ暫ク止メ其事ヲ次ノ會議
一日ニ延シテ其日ニ至リ更ニ陪審ヲシテ商
議セシム可シ但シ以前ノ陪審ハ再度ノ陪審
ノ員中ニ参加ス可カラス
此條ニ記スル事ハ願フ以テ為ス可カラス陪
審ノ決断ヲ公ケニ言渡シタル後裁判所ノ公
務ヲ以テ之ヲ為ス可シ

再度ノ陪審ノ決断以前ノ陪審ノ決断ト同ニ
其時ト雖モ裁判所ニテ再度ノ陪審ノ決断ヲ
取消シ更ニ陪審ヲシテ商議セシム可カラス
第三百五十三條○証人ノ吟味及ヒ双方辯論ヲ
為シ始メタルヨリ陪審ノ決断ヲ為スニ至ル
迄ハ間断ナク且外人ト談話スルコトナク其手
續ヲ繼續シテ行フ可レ○上席人ハ裁判役陪
審、証人、被告人等ノ休息ノ為メ必要ナル時間
ハ其手續ヲ止ムルヲ得可レ
第三百五十四條○呼出ラ受ケタル証人出席セ

サレ時ハ裁判所ニテアロキユリユルゼ子ラル
ノ求メニ從ヒ証人ノ姓名目錄書中ノ最初ニ
記レタル者証ヲ申述ハサン内ニ罪犯ノ吟味
ヲ次ノ會議ニ付キ罪犯ノ吟味ヲ次ノ會議ニ
第百五十五條〇若シ証人呼出ヲ受ケテ出席

セサルニ付キ罪犯ノ吟味ヲ次ノ會議ニ
延ハス時ハ總テ証人等呼出ノ費用、証書類ニ
付テノ費用、証人等ノ旅費及ヒ其他其罪犯一
件ヲ裁判スル為メノ費用皆其出席セサル証
人等ノ擔當ニ可ク但シ其証人ハ刑罰ノキユリ

ルセ子テ此ノ求メニ因リ次ノ會議ニ付キ吟
味ヲ延テ言渡書ヲ以テ此等ノ費用ヲ償フ
可キ度言渡ヲ受ケ若シ之ヲ償ハサルニ於テ
ハ召捕ヘラル可ク又ハ其證人トシテ其證
又今上ノ言渡書ニハ其証人トシテ証ヲ述ヘ
ルニ公ケテ兵力ヲ以テ之ヲ裁判所ニ
引出ス可キ旨ヲ記ス可ク又ハ其證人トシテ
又如何ナル場合ニ於テモ呼出ヲ受ケテ出席
スルニ証人又ハ出席スルト雖モ誓ヲ為スルヲ
肯セズ或ハ証ヲ述フルト肯セサル証人ハ

才八十条ニ記スル所ノ罰ヲ言渡サル可也

第三百五十六條○其言渡ヲ受ケタル証人ハ其

住所ニ其言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ十日内

ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ得可ク又

其住所隔リタル時ハ五日ヨリヤムコトル毎ニ

一日ノ猶豫ヲ増ス可レ但シ其証人出席ヲ為

サシテ正当ノ差支アリシ証ヲ立テ又ハ其罰

金ヲ更ニ減ス可キ道理アル証ヲ立テ又ハ其時

其故障ノ申述ヲ聞届ク可キ由貴州ノ罰

及第ニ款○裁判言渡ノ事及裁判言渡

ノ如ク執行ノ事

第三百五十七條○上席人ハ被告人ヲ出席セ

メタル上書記官ヲ立テ其面前ニ於テ陪審

決断書ヲ讀上ケル可レ

第三百五十八條○陪審ノ決断ニテ被告人ヲ無

罪ナリトスル時ハ上席人ヨリ被告人罪犯ノ

告訴ヲ免レタル旨ヲ言渡シテ之ヲ赦宥ス可

キコトヲ命ス可レ但シ他ノ原由ノ為メ禁錮

ヲ命スル時ハ格別テリトス

然ル後被^{被告}方^の損失ノ償ヲ得ルコト求メ且



第三百五十九條○被告人ヨリ其罪犯申立人又

ハ民事ノ原告人ニ対シ損失ノ償ヲ求ムル訴

又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人又ハ既ニ刑ヲ

言渡サレシ者ニ対シ損失ノ償ヲ求ムル訴ハ

重罪裁判所ニ之ヲ為ス可シ

民事ノ原告人ハ裁判言渡ノ前ニ損失ノ償ヲ

得シトスル訴ヲ為ス可シ其裁判言渡ノ後ニ

至リテハ其訴ヲ許サズ

又被告人其犯罪申立人ヲ知リタル時ニ前項

ニ記スル所ニ等シトス

又被告人裁判言渡ノ後ニ至リ其犯罪申立人

ヲ知リタル時ト雖モ猶重罪裁判所ハ會議中

タルニ於テハ其被告人重罪裁判所ニ損失ノ

償ヲ得シトスル訴ヲ為ス可シ若シ之ヲ為サ

サル時ハ其訴ヲ為ス可キ所推テ失フ可シ○

又被告人重罪裁判所ノ會議ノ終リニ後ニ其

犯罪申立人ヲ知リタル時ハ民法裁判所下等裁判

所ニ同上ノ訴ヲ為ス可シ

又罪犯人吟味ニ参加セザリシ者ハ民法裁判

所ニ損失ノ償ヲ得ント訴フ可キハ
第三百六十條○正当ニ無罪ナリトノ言渡ヲ得
タル者ハ同一ノ事ニ付キ再ヒ其罪ヲ訴ヘラ
ル、トナカル可シ

第三百六十一條○辯論ノ時間証書ニ因リ又ハ
証人ノ申述ニ因リ被告人ニ更ニ他ノ罪犯ア
リト思ハル、時ハ上席人其被告人ニ無罪ノ
言渡ヲ為シタル後其被告人他ノ罪犯ノ事ニ
付キ更ニ訴ヲ受ク可キ旨ヲ言渡シ且其被
告人ニ對シ第九十一條ニ記スル差別ニ從ヒ

呼出状ハ引出状ヲ出シ別段ノ道理
時^{或ハ}收監状ヲ出シテ重罪裁判所所在ノ地ノ
下吟味掛^{ニ送り}ル裁判役ノ面前ニ至テ更ニ下
吟味ヲ受ケシム可シ

然レモ此事ニ付テハ嘗テ為シタル吟味ノ未
タ終テサル中ニ言ハステトビエブルツク^更
ニ他ノ罪ヲ訴フ可キ旨ヲ取極メ置ク^{ハルベカラス}ト必
要トス

第三百六十二條○陪審被告人ヲ有罪ナリト決
断スル時ハ

之ヲ罰ス可キヲ裁判所ニ求ム可キ
民事ノ原告人ハ取戻ノ求メ及ヒ損失ノ償ヲ
得ントスル求メヲ為ス可シ

第三百六十三條○上席人ハ被告人ニ辯論セン
ト欲スル事ヲキヤ否ヲ問フ可シ

被告人及ヒ其代言人ハ其申立テタル所為ノ
偽タルヲ述ノルトテ得ス唯其所為ヲ法律上
ニ禁セサル事又ハ法律上ニ三罪犯ト為サ
ザル事又ハコトヲ異キユリニ事ニ依テ
如キ刑ニ處セラルルノ理ナキ事又ハ民事

原告人ニ損失ノ償ヲ為スニ及ハサル事又
民事ノ原告人ノ求ムル所ノ償高過分ナル
事ヲ申述フルヲ得可シ

第三百六十四條○倍審被告人ヲ有罪ナリト決
断シタルト雖モ刑法上ニテ其所為ヲ禁スル

了ナキ時ハ裁判所ヨリ其赦罪ヲ言渡ス可シ
第三百五十八條ト異ナリテ被告人罪ヲ犯シ
タルニ相違ナシト雖モ刑法中ニ其犯罪ニ當
ル可キ箇條ナキヲ以テ其罪ヲ赦スルコト
三百五十八條ニテ上席人無罪ヲ言渡シ此
條ニテハ裁判彼全負ニ

第三百六十五條○若シ其所為刑法上ニテ禁止

車

セシ中タル時ハ吟味ノ上重罪裁判所ノ管轄
ノ可キ所ニ非ナルト即チ輕罪註誤分明タル
ニ至ルト雖モ重罪裁判所ニテ其刑ヲ言渡ス
可シ二第百九十九條見合
若シ被告人ニ數箇ノ重罪及ヒ輕罪アル時ハ
其中最重ナル罪ニ因テ其刑ヲ定ム可シ
第百六十六條○被告人ノ赦罪ヲ言渡シタル
時ハ四第百六十六條之ヲ無罪ナリト言渡シ或ハ
刑ニ處ス可キトヲ言渡シタル時ト同シ三重
罪裁判所ニテ民事事ノ原告人又ハ被告人ノ求

ムル所ノ損失ノ償ヲ裁判シテ其高ク定メ又
ハ第百五十八條ニ記スル如ク裁判役中ノ
一員ヲシテ双方ノ申述ヲ聽キタル其書類ヲ
檢視セシメ且此等ノ諸事ヲ裁判所ニ申立テ
シム可シ
又重罪裁判所ニテ被告人ノ枉奪シタル物件
又其所有者民事事ノ還ス可キトヲ言渡ス可
シ
然レモ被告人ニ刑ヲ言渡シタル時ハ全上ノ
物件ノ所有者被告人定期内ニ覆審院ニ上告

スルナク又ハ上告スト雖凡覆審院ニテ重
罪裁判所ノ言渡ヲ確定シタル證ヲ立テタル
ニ此サレハ其物件ヲ取戻ス可カラス

第百六十七條○倍審被告人ニ故看ス可キノ
事情第百三十一條以下見合アリト決断シタ
ル時ハ裁判所ニテ刑法ニ記スル如ク言渡ス
可シ

第百六十八條○被告人刑ヲ言渡サレ又ハ民
事ノ原告人負訴訟トナル時ハ官ト相手方ト
ニ對シ裁判所ノ費用ヲ償フ可シ

重罪ニ付キ民事ノ原告人負訴訟トナラサレ
時ハ裁判所ノ費用ヲ擔當スルニ及ハス

又民事ノ原告人千八百十一年第六月十八日
ノ命令書ニ循ヒ裁判所ノ費用高ク官ニ預ケ
タル時ハ之ヲ其原告人ニ還ス可シ

第百六十九條○裁判役ハ低聲ニテ許議ヲ為
ス可ク又別席ニ退テ許議ヲ為ス可ク得可シ
然レモ裁判言渡ハ衆庶並ニ被告人ノ面前ニ

テ上席人高聲ニ之ヲ為ス可シ且其所為
上席人其言渡ヲ為ス前ニ其罪犯ニ管スル刑

法ハ箇條ヲ読上ク可シ
書記官ハ其裁判言渡ヲ書面ニ記シ且其刑法
ノ箇條ヲ記入ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ
百フランクノ罰金ヲ言渡サル可シ

第三百七十條○裁判言渡書ノ正本ハ之ニ管
タル裁判役皆姓名ヲ手署ス可シ若シ此規則
ニ背ク時ハ書記官百フランクノ罰金ヲ言渡
セ又別段ノ道理アル時ハ書記官並ニ裁判
役損害ノ償ヲ為ス可キノ訴ヲ受ク可シ
裁判言渡書ノ正本ハ其言渡ノ時ヨリ二十四

時間ニ裁判役姓名ヲ手署ス可シ

第三百七十一條○上席人ハ裁判言渡ヲ為シタ
ル後其時ノ模様ニ從ヒ被告人ニ固志耐忍ス
可キトテ諭シ又ハ後日其行状ヲ改ム可キト
テ諭ス可シ
又上席人ハ被告人ニ覆審院ニ上告スルヲ得
可キ権アルトテ其權ヲ行ニ得可キ期限トテ
告ク可シ

第三百七十二條○書記官ハ法律上ニ定ムル所
ノ法式ヲ盡ク行フタルヲ証スル為メ重罪裁

判所會議ノ調書ヲ記ス可シ
其調書ニハ被告人ノ答詞及ヒ証人ノ申述ヲ
記ス可カラズ但シ第三百十八條ニ循ヒ証人
申述ノ変更及ヒ齟齬シタル事ヲ記スルハ格
別ナリトス

其調書ハ上席人ト書記官ト姓名ヲ手署ス可
シ但シ其調書ハ預メ之ヲ刊行ニ置ク可カラ
ズ
若シ此條ノ規則ニ循ハサル時ハ調書ノ効力
カル可シ

若シ書記官調書ヲ記スルヲ急リ又ハ此條第
三項ノ規則ニ背ク時ハ五百フランノ罰金
ヲ言渡ナル可シ

第三百七十三條ノ刑ヲ言渡サレシ若ハ其言渡
ラ受ケタルヨリ覆審院ニ上告セシトスル
ヲ書記官ニ由出ワルニ至ル迄三日ノ猶預ヲ
得可シ
又「プロキユール」セキラルハ全上ノ猶預ノ期
限内ニ覆審院ニ上告セシトスルヲ書記官
ニ由出ワ可シ

民事ノ原告人モ亦全上ノ期限内ニ覆審院ニ
上告セシトスルコトヲ書記局ニ届出ソルヲ得
可シ但シ民事ノ原告人ハ其民事ノ権利ノ
ニ付キ其上告ヲ為スヲ得可シ
全上ノ期限内ハ重罪裁判所言渡ノ執行ヲ暫
ク延ハス可シ又覆審院ニ上告シタル時ハ覆
審院ノ言渡書ヲ受取ルニ至ル迄其執行ヲ暫
ク延ハス可シ

第三百七十四條○第四百九條及シ第四百十二
條ノ場合ニ於テハ「プロキユリユトルゼ子ラレシ又

ハ民事ノ原告人ニ二十四時内ニ覆審院ニ上告
ス可シ

第三百七十五條○第三百七十三條ノ記シタル
猶預ノ期限内ニ覆審院ニ上告セサル時ハ其
期限ノ終リヨリ二十四時向ニ犯人ヲ刑ニ處
ス可シ又覆審院ニ上告シタル時ハ覆審院ニ
テ其上告ヲ棄却スル言渡書ヲ受取リシヨリ
二十四時向ニ刑ニ處ス可シ

第三百七十六條○犯人ヲ刑ニ處スルニ付テハ
「プロキユリユトルゼ子ラレシ其指揮ヲ為ス可シ但

レノ口キユリエトルゼ子ラレハ此事ニ付キ直チ
ニ公ケノ兵力ノ助ヲ借ラント求ムルコトヲ得
可シ

第三百七十七條。刑ヲ言渡サレタル者刑ニ處
セラル。前ニ申述ニト欲スル事アル時ハ之
ヲ刑ス可キ地ノ裁判役一員書記官ノ立會ニ
テ之ヲ聽ク可シ

第三百七十八條。書記官ハ犯人ヲ刑ニ處シタ
ルニ調書ヲ記シ二十四時間ニ之ヲ重罪裁判所
ノ裁判官言渡書ノ末ニ登記ス可シ若シ此規則

ニ背ク時ハ百コラシクノ罰金ヲ言渡サル可
シ。又書記官ハ其登記ヲ為シタル部分ニ姓
名ヲ手署シ且此等ノ諸事ヲ調書ノ端ニ附記
ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ百コラシクノ
罰金ヲ言渡サル可シ。又書記官ハ其附記シ
タル部分ニモ亦姓名ヲ手署ス可シ但シ調書
ヲ裁判官言渡書ノ末ニ登記シタル時ハ其登記
ヲ調書ノ正本ニ等シク記ト為ス可シ
第三百七十九條。犯人ヲ刑ニ處ス可キ裁判官
渡ヲ為ス以前其吟味中ニ証書ニ據リ又ハ証

人ノ申述ニ據リ其犯人更ニ他罪アルコトヲ知
リ其罪是迄申立ラレタル罪ヨリ更ニ重キ模
様ナル時又ハ其犯人ト共ニ罪ヲ犯セシ若シ
捕一ラレタル時ハ重罪裁判所ニテ其更ニ兇
覺シタル罪ニ付キ治罪法ノ規則ニ循ヒ再ヒ
犯人ノ罪ヲ告訴ス可キコトヲ言渡ス可シ
此等ノ場合ニ於テハ「プロキユリユールゼ子ラレ
再度ノ訴ニ付キ裁判言渡アル迄ハ初度ノ言
渡ノ如ク執行ヲコトフ暫ク延ハス可シ」
第三百八十條○重罪裁判所ノ裁判言渡書ノ正

本ハ之ヲ集メテ「デバルトマシ」ノ首府ノ下等
裁判所ノ書記局ニ納ム可シ
然レ凡上等裁判所所在ノ地ニアル重罪裁判
所ノ裁判言渡書ノ正本ハ其上等裁判所ノ書
記局ニ納ム可シ

第五章○陪審ノ事及ヒ陪審ヲ撰ム方法
第一款○陪審ノ事

第三百八十一條○(千八百五十三年第六月四日

左ノ如ク改ム)滿三十歳ノ齡ニシテ政權、民權、
族權、親族會議ニ加ハルノ權後見ヲ有シ且後

ノ二條ニ記スル差支ナキ者ニ決サレハ倍番
トナル可カラズ若シ此規則ニ背ク時ハ其決
断ノ効ナカル可シ

第三百八十二條〇(千八百九十三年^{三世那破倫}第六月四日
左ノ如ク改ム)左ノ数人ハ倍番トナル可カラ
ズ

第一〇施体ト加辱トノ刑ヲ言渡サレシ者
又ハ加辱トニノ刑ヲ言渡サレシ者

第二〇重罪ニ付キ懲治ノ刑ヲ言渡サレシ
者

第三 徒刑ヲ言渡サレタル者

第四 三月以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル
者

第五 盜奪詐偽破信ノ罪又ハ公ケノ監守
又其監守^{自盜}スル物件ヲ奪フタル罪又ハ刑

法第百三十三條及ヒ第百三十四條ニ
記シタル風俗ヲ破ル罪又ハ人倫ノ道或

ハ法教ノ道ヲ害スル罪又ハ物件所有ノ
權或ハ親族ノ權ヲ犯スノ罪職業ナク且
生計ノ道ナク寄遊スル罪乞食ノ罪ヲ犯

シタルニ付キ禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル
者及ヒ募兵ノ事ニ付キ千八百三十二年
茅三月二十一日ノ法律ノ茅三十八條茅
四十一條茅四十三條茅四十九條ノ規則
ニ背キ又ハ刑法茅三百十八條及ヒ茅四
百二十三條ノ規則ニ背キ或ハ千八百五
十一年茅三月廿七日ノ法律ノ茅一條ノ
規則ニ背キタルニ付キ禁錮ノ刑ヲ言渡
サレタル者
但シ其禁錮ノ期限如何ヲ問フナシ

第六〇高利貸ハ罪ノ為メ刑ヲ言渡サレタ
ル者

第七〇重罪ヲ告訴セザル者及ヒ重罪
ニ付テ其執傳者

第八〇職ヲ退ケテ其職ニ就ク者及ヒ書記官
及ヒ裁判所官

第九〇復権ヲ得サル者及ヒ其裁判

第十〇治産ノ禁ノ受ケレ者及ヒ其他裁判

所ヨリ任セタル補佐人ノ世話ヲ受ク
ル者

第十一〇治罪法第三百九十六条及七刑法
第四十二条ニ循ヒ倍審タルノ禁ヲ受ケ
ル者

第十二〇取監状又ハ禁錮状ニ因リ召捕レ
タル者

第十三〇一月以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレタ
ル者其刑期ノ終リヨリ五年ノ時間

第三百八十三條〇(千八百五十三年第六月四日)
左ノ如ク改ム左ノ職ニ在ル者ハ倍審ノ職務
ヲ兼子行有可ハテ

執政
元老院ノ長

議事院ノ長
参議官負

執政局ノ書記長

州長及ニ郡長
州會ノ議負

裁判役

裁判所
邏卒長

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

官許アル法教ノ僧徒

現ニ奉職スル海陸軍ノ士卒
租税官署官ノ森林電信機官署ニテ現ニ奉

職スル官負

コトムニユリシノ小學校ノ授業師

又左ノ諸人ハ陪審トナル可カラス

雇ノ僕婢

佛蘭西ノ文字ヲ讀ミ佛蘭西ノ文字ヲ書ク

了ラサル者

一千八百三十八年茅六月三十日ノ法律ニ循

又七 狂病院ニ入りタル者

又左ノ諸人ハ陪審タルヲ免ルコトヲ得可シ

茅一〇七十歳以上ノ者

茅二〇毎日ノ所作ニ因リ生計ヲ営ム者

茅三百八十四條〇(廢ス)

茅三百八十五條〇何人ニ限ラス別段裁判所ノ

言渡アルニ非サレハ一千八百九十三年茅六月

四日ノ法律茅十一條以前ノ治罪法茅三百八

十二條ニ記スル陪審姓名目錄ノ中ヨリ除去

セラルコトナカル可シ但シ其言渡ヲ控訴シ

又ハ其言渡リ取消ヲ覆審院ニ上告シタル間
ハ其言渡ノ執行ヲ暫ク止ム可シ

茅三百八十六條〇(廢ス)

茅三百八十七條〇(廢ス)

茅三百八十八條〇(廢ス)

茅三百八十九條〇陪審ト為ス可キ各人ニハ其

全負ノ姓名目録ヲ送ルニ及ハス但シ其姓名

ノ加ハリタル証トシテ刑長ヨリ唯其目録ノ

拔書ヲ送ル可シ〇其拔書ハ姓名目録ヲ現ニ

用ニ供スルヨリ少クトモ八日前ニ之ヲ送ル

可シ

其姓名目録ヲ現ニ用ニ供ス可キ期日ハ其拔

書ニ之ヲ附記シ且其日ニ出席ス可キ時出ラ

附記ス可シ若シ其日ニ出席セサル者ハ此法

ニ記スル所ノ罰ヲ受ク可シ茅三百九十

若シ其拔書ヲ送達スル時本人其住所ニアラ

サル時ハ其住所トメイル又ハ其補佐トニ之

ヲ届ケ後ニメイル又ハ其補佐ヨリ本人ニ其

旨ヲ告知ス可シ

茅三百九十條〇圍引ニテ選ビタル陪審四十名

中ニ葺テ千八百五十三年券六月四日ノ法律
券十一條(以前ノ沼罪法券三百八十七條)ニ循
ヒ姓名目錄ヲ記シタル後死去スル者アリ又
ハ陪審ノ職務ヲ行フ丁能ハサルニ至リシ者
アリ又ハ陪審ノ職務ヲ兼テ行フ可カラサル
職ヲ授リタル者アル時ハ重罪裁判所會議
席ニテアロキエリルゼラ止ノ申立ヲ聽キ
タル上其代負ヲ撰ム可シ
其代負ヲ撰ム方法ハ千八百五十三年券六月
四日ノ法律券十八條(以前ノ沼罪法券三百八

十八條)ニ記シタル所ニ循フ可シ
券三百九十一條○陪審其職務ヲ為シ終リタル
上ハ其姓名目錄即姓名目錄ヲ取消ス可シ○
臨時ニ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク時ノ外券三
百八十九條ニ記スル呼出ニ應シタル陪審ハ
一年內ニ二度姓名目錄千八百五十三年券六
月四日ノ法律券十一
條ニ記スル陪
審全負ノ目錄ノ中ニ書加ハラルヲ開ク時
可シ○又臨時ニ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク時
ニ雖モ一年ニ二度以上姓名目錄中ニ書加ハ
ラルヲナシテ十カレ可シ○重罪裁判所ノ會議

開ク前ニ其裁判所ニテ暫時間ノ事ト思料セ
シ差支ニ因リ出席セサル倍審ハ芽三百八十
九條ノ呼出ニ應ニタルモト為ス可カラス
○其陪審ノ姓名及ヒ一度罰金ヲ言渡サレ又
ハ再度罰金ヲ言渡サレタル倍審芽三百九十
六條見合
ノ姓名書ハ重罪裁判所ノ會議終リタル後直
チニ之ヲ上等裁判所ノ上席人ニ送り其上席
人其旨ヲ倍審ノ全負姓名目錄芽八百四十三
年芽六月四日
ニ記入ス可シ但シ本年
法律芽十一條
ニ記シタルモ
内ニ關引ニ為ス丁ホキ時ハ此等ノ倍審ノ姓

名ヲ翌年ノ姓名目錄中ニ加フ可シ
芽三百九十二條○司法警察ノ職ヲ行フ者証人
通辨人鑑定人又ハ原告或ハ被告タル者ハ其
同一ノ事件ニ付キ陪審トナル可カラス若シ
此規則ニ背ク時ハ其陪審ノ為ニタル決断ノ
知テカル可シ

ムル事

芽三百九十三條○(千八百五十三年芽六月四日
左ノ如ク改メ)嘗テ定メ置キタル期日ニ至リ

不在又ハ其他ノ原由ニテ陪審ノ數三十名ニ
足ラサルニ至ル時ハ陪審補員中ヨリ其姓名
ヲ記入レタル順序ニ從ヒ其數ヲ補フテ之ヲ
三十員ニ充タシム可シ若シ又其補員ニテ猶
三十員ニ充タシムルニ足ラサル時ハ裁判所
吟味ノ席ニテ別段ノ姓名目錄中ヨリ闡列ニ
テ陪審ヲ撰ミ其陪審ヲ以テ三十員ニ充タシ
ム可ク猶未タ足ラサル時ハ一年分ノ陪審全
員目錄中ヨリ之ヲ撰ミ其數ニ充タシム可シ
千八百十年第七月廿五日ノ命令書第九十條ニ

記スル場合ニ於テハ裁判所吟味ノ席ニテ一
年分ノ陪審全員目錄中ヨリ闡列ニ為シ其三
十員ノ數ニ充タシム可シ
第九十四條○決断ヲ為ス可キ陪審ハ必ス
十二員ニ下ル可カラズ
罪犯ノ吟味速ニ終ル可カラサル模様ナル時
ハ重罪裁判所ニテ陪審ノ姓名ヲ闡列ニ為ス
前ニ十二員ノ陪審定員ノ外別ニ一二名ヲ撰
ミ之ヲシテ吟味ニ立會ハシムル丁ヲ言渡ス
ヲ得可シ

其十二名ノ中ニテ、決断ヲ為スニ至ル迄引續
キ吟味ノ席ニ出ツル丁能ハサル者アル時ハ
其補算ヲ別ニ撰ミ之ニ代ル可シ
其代ル可キ順序ハ嘗テ闡引ヲ為シタル時ノ
順序ニ從フ可シ

第百九十五條○陪審ノ姓名目錄通例四十八
十二名ノ定負ヲ撰ム前日ニ之ヲ各被告人ニ
送ル可シ若シ更ニ早ク之ヲ送り又ハ更ニ遲
ク之ヲ送ル時ハ其送達ノ効ナク並ニ其後ノ
諸件ノ効ナカル可シ

第百九十六條○倍番呼出シ受ケテ出席セザ
ル時ハ重罪裁判所ヨリ罰金ヲ言渡サル可シ
但シ其罰金ハ

初犯ニ付テハ五百フランク、
再犯ニ付テハ千八百五十三年改メテニ
百フランクトス

三犯ニ付テハ千五百フランク、
三犯ノ時ハ其若クハ陪審タル可カラサルノ
言渡シ受ケ其若クハ費用ニテ其言渡書ノ刊行
シ之ヲ貼附ス可シ

第百九十七條○審テ定メ置キタル期日ニ出

席スルヲ能ハサルノ証ヲ立テタル陪審ハ前
條ノ例外ナリトス

其辨解スル所ノ正否ナルヤ否ハ裁判所ニテ
之ヲ裁判ス可シ

第三百九十八條〇陪審出席ヲ為スト雖凡其職
ヲ為シ終ラサル中ニ正否ノ原由ナクシテ其

席ヲ退ク時ハ第三百九十六條ニ記スル所ノ
罰ヲ受ク可シ但シ其原由ノ正否ナルト否ト

ハ裁判所ニテ之ヲ裁判ス可シ
第三百九十九條〇各罪犯人訴ニ付キ復返シタ

ル日ニ至リ吟味ノ席ヲ開ク前ニ陪審數員十

名並ニ被告人及ヒ其ノキエリタル女子ヲ陪審人

面前ニ於テ各陪審人姓名ヲ呼上ク可シ但シ

正當ノ原由アリテ出席セサル陪審人ハ出席

スルヲ免レタル陪審人第三百八十三項見合ハ姓名ハ

之ヲ除ク可シ

其呼上ニ答フル各陪審人姓名票ヲ壺中ニ入

ル可シ

陪審人姓名票ヲ次第ニ壺中ヨリ取出スニ從

テ最初ニ被告人又ハ其代官人ヨリ其陪審ヲ

除去不可キト述ハ次ニプロキユールゼ子
ラルヨリ其旨ヲ述フ可シ但シ後ヲ記スル定
負^{十二}六^フ負ニ至リテ其除去ノ申述ヲ止ム可シ
被告人又ハ其代言人及ヒプロキユールゼ子
アルハ倍審ヲ除去スルニ付テノ旨趣ヲ述フ
可カラス
斯ノ如ク除去ノ申立ヲ為サシメタル上ニテ
其申立ヲ受テナル倍審十二負ノ姓名票壺中
ヨリ出テ各々時ニ決断ヲ為ス陪審ト定ム
可シ

第四百條○被告人並ニプロキユールゼ子

倍審十二負ノ姓名票壺ニ至ル迄陪審人

除去ヲ申立ル得可シ

第四百一條○被告人トハ

トハ倍審ノ同一ノ負數ヲ除去スルヲ得可

若シ倍審ハ全負奇數ナル時ハ被告人ノ倍

審ヲ除去シ得可キ負數ヲプロキユールゼ子

ルヨリモ更ニ一名多シトス

第四百二條○被告人數人アル時ハ互ニ協議シ

テ倍審ヲ除去シ又ハ各自ニ之ヲ除去スル

自由ナリトス

此場合ニ於テハ前數條ニ循ヒ被告人一人ハ

除去シ得可キヨリ更ニ多數ヲ除去ス可カラ

第四百三條〇被告人數人其除去スルコトヲ協議

ヒサル時ハ各之ヲ為スニ付キ其順序ヲ圖リ

〇此場合ニ於テハ其順序ニ

從ヒ一人ハ除去シタル倍審ハ即チ數人ノ除

去シタルモ復テ各其順序ニ從テ陪審審定

第四百四條〇又被告人數人ニテ陪審定員ノ中

一部ヲ協議シテ除去シ他ノ一部ヲ各自ニ其

順序ヲ定メ除去スルコトヲ得可シ

第四百五條〇十二員ノ倍審定マリタル後直チ

ニ被告人ノ吟味ニ取掛ル可シ

第四百六條〇何事ニ因ラス事故アリテ告訴狀

ニ記スル罪犯ニ付キ被告人ノ吟味ヲ為スト

テ裁判所ノ次ノ會議迄延ハシタル時ハ更ニ

改メテ陪審ノ姓名書ヲ造リ且前數條ニ記ス

ル如ク更ニ其除去ヲ為シ十二員ノ陪審ヲ定

ム可シ若シ此手續ヲ為サニル時ハ其決断ノ効ナカニル可シ

第四百五條ノ二目又前卷ノ六ノ其其直ニ
前卷ノ六ノ論ニ及ビテ傳書下向ノ教人ノ除
去ノ時ハ對辯ノ手續ニ依リテ各處ニ是
ノ旨ヲ通知スルハ必要ナシトシテ其旨ヲ
第四百五條ノ二目又前卷ノ六ノ其其直ニ
前卷ノ六ノ論ニ及ビテ傳書下向ノ教人ノ除
去ノ時ハ對辯ノ手續ニ依リテ各處ニ是
ノ旨ヲ通知スルハ必要ナシトシテ其旨ヲ

第三卷ノ裁判言渡ヲ取消サント預メテ方法

（千八百八年第十二月十日決定同月二十

日布告）

第一章ノ吟味ノ手續及ビ裁判言渡ヲ取

消ス事覆審院ハ取消
ヲ願出ルヲ云

第四百七條○重罪輕罪誣誤ニ付キ為ニタル終

審ノ裁判言渡及ビ其言渡ヲ為ス前ノ吟味ノ

手續ハ後ノ數條ニ記スル場合ト差別トニ循

ヒ之ヲ取消スルヲ得可シ

第一款○重罪ニ付テノ裁判言渡ヲ取

消ス事

第四百八條○重罪、被告人刑ヲ言渡サレタル

時、嘗テ上等裁判所ノ重罪取調局ヨリ其被告
人ヲ重罪裁判所ニ移シタル言渡又ハ重罪裁
判所ニテ為シタル吟味ノ手續又ハ重罪裁判
所、廢刑ノ言渡ニ必要ナル法式ニ違ヒ或ハ
法式ヲ缺ク事アリテ、此治罪法ニ其法式、如
ク行ハル時ハ其言渡及ヒ吟味手續、効ナ
キトテ別段定メテ於テハ刑ヲ言渡サレ
タル者又ハ言渡スルモノトシテリツクヨリ、

未ノニ因リ、廢刑ノ言渡及ヒ効ナキ吟味、手
続ヨリ後、諸件ヲ取消ス可シ、
又言渡ヲ為シタル裁判所、管轄異ナリタル
時、又ハ裁判所ニテ被告人又ハ言渡スルモノ
トシテ法律上ニ於テ授ケリタル權利
ニ因リ求ムル所ニ付キ、其言渡ヲ為スル肯セ
ス、又ハ言渡ヲ為スル^{欠キ}怠リタル時ハ、此治罪法
ニ裁判言渡又ハ吟味手續、効ナキトテ別段
定メサル場合ト雖、亦前項ニ等シク之ヲ取
消ス可シ、

第四百九條○裁判所ヨリ重罪被告人ヲ無罪ナ
リト言渡シタル時ハ、ヨニスラトールピユブリツ
クヨリ、法律ヲ保護スル為メノミニ付キ、其無
罪ノ言渡及ヒ其前ニ為シタル吟味ノ手續ヲ
取消サント求ム可シ、但シ是カ為、被告人ノ
害ヲ為ス可カラズ、

第四百十條○重罪裁判所ヨリ罪犯ニ付キ言渡
シタル刑ト、其罪犯ニ付キ法律上ニ定メタル
刑ト異ナルニ因テ、其言渡ヲ取消ス可キ時ハ、
ヨニスラトールピユブリツク又ハ、刑ヲ言渡サレ

シ被告人ヨリ、其取消ヲ求ムルヲ得可シ、
又重罪裁判所ニテ、刑法中ニ罪犯ニ管シタル
刑ナキヲ以テ、第三百六十四條ニ記スル如ク
被告人ヲ赦宥スル言渡ヲ為シタル時、ヨニス
テールピユブリツク其罪犯ニ管シタル刑アリ
トスルニ於テハ、ヨニスラトールピユブリツク其
赦宥ノ言渡ヲ取消サント求ムルヲ得可シ、
第四百十一條○裁判所ヨリ言渡シタル刑ト、刑
法上ニテ定ムル所ノ刑ト相違スルヲナキ時
ハ、其言渡書ニ誤テ刑法中ノ他ノ箇條ヲ抄出

シタルヲ以テ口実ト為シ其言渡ヲ取消サシ
ト求ム可カラス

第四百十二條〇如何ナル場合ニ於テモ民事ノ

原告人ハ重罪裁判所ヨリ被告人ヲ無罪ナリ

トスル言渡又ハ被告人ヲ赦宥スル言渡

見合十四條ヲ取消サシト求ム可カラス然レモ裁

判所ニテ其言渡書ヲ以テ被告人ノ求ムル所

ヨリ更ニ過分ナル損失ノ償ヲ民事ノ原告人

ニ言附タルトアル時ハ民事ノ原告人其言渡

書外中ニテ其言附ニ管スル部分ヲ取消サシ

ト求ムルヲ得可シ

第四百一十條第一款〇輕罪又ハ誣誤ニ付テハ裁判

言渡ヲ取消ス事

第四百十三條〇輕罪又ハ誣誤ニ付テハ裁判所

ヨリ被告人ニ刑ヲ言渡シタルト之ヲ赦宥シ

タルトト問ハスコトスレトモ又

ハ被告人又ハ民事原告人第四百八條ニ循ヒ

終審ノ裁判言渡ヲ取消サシト求ムルヲ得

可シ

然レモ被告人赦宥ノ言渡ヲ得タル時ハ

然レモ被告人赦宥ノ言渡ヲ得タル時ハ

三、巴ノ權利ヲ保護スル
ノ法式ニ付テ、其缺畧ヲ申
出シ、其法式ニ依リテ
シテ、其法式ニ依リテ

ス、テ、ール、モ、ユ、プリ、ツ、ク、レ、又、ハ、民事原告人ヨリ被
告人ノ權利ヲ保護スル為メ、法式ニ違フタ
ル事、又、ハ、其法式ヲ缺キタル事ヲ申立テ、其故
省ノ言渡ヲ取消サント求ムルコトヲ得ス、

第四百十四條○第四百十一條ノ規則ハ、輕罪及
ニ、誣誤ニ付キ為シタル終審ノ裁判言渡ニ通
シ用フ可シ、

第三款○前二款ニ通シ用フ可キ規則
第四百十五條○覆審院又ハ上等裁判所ニテ、吟
味ノ手續ヲ取消ス時ハ、其過失アル官吏、又ハ

下吟味掛リ裁判役ノ費用ヲ以テ、其吟味ノ手
續ヲ再ヒ行ハシム可キコトヲ言渡スヲ得可シ、

然レモ此等ノ官吏ニ重キ過失アリテ、且此治
罪法ヲ布告シタルヨリ二年ノ後ニ非サレハ、
此条ノ規則ヲ通シ用フ可カラス、

第二章○覆審院ニ願出ス事裁判言渡又
吟味手續

第四百十六條○本案ニ管セサル預審ノ言渡預
審
ニシテ且終審
ノ言渡ヲ去フハ、確定ノ裁判言渡ノ後ニ非サ
レハ、之ヲ取消サント求ム可カラズ、但ヒ一方

ノ者、自己ノ随意ニテ、其預審ノ言渡ノ如ク執
行フタリト虽氏、後ニ其言渡ヲ取消サント求
ムル時、相手方ヨリ其取消ヲ拒ムノ憑據ト為
ス可カラズ。

裁判所ノ管轄ノ異ナリタルニ付キ、其言渡ヲ
取消サント求ムル時ハ、此条ノ規則ヲ通シ用
フ可カラズ。確定ノ裁判言渡ヲ為サハル前ト
虽氏取消ヲ訴ヘ得可キヲ云フ

第四百十七條○刑ヲ言渡サレトモ被告人其言渡
ノ取消ヲ願ハントスル時ハ、其願書ヲ書記官
ニ出シ、其被告人ト書記官ト之ニ姓名ヲ手署

ス可シ。若シ被告人姓名ヲ手署スル丁ヲ欲セ
ス、又ハ之ヲ知ラサル時ハ、其旨ヲ附記ス可シ。
又刑ヲ言渡サレシ被告人ノ代書師又ハ其名
代人ヨリ其願ヲ為ス時モ、其願書ヲ出スニ付
テノ法式ハ、亦前ニ記スル所ニ等シトス、但シ
名代人ヨリ其願ヲ為ス時ハ、名代ノ証書ヲ其
願書ニ添ヘ差出ス可シ。
其願書ハ、別段設ケタル簿冊ニ之ヲ登記ス可
シ、但シ其簿冊ハ公ケニ衆庶ニ示ス可ク、如何
ナル人ト雖氏、其板書ヲ受取ル丁ヲ得可シ。

第四百十八條 ○民事ノ原告人又ハ「ミ」ニステ
ルビエブリツクヨリ重罪輕罪註誤ニ付キ、為シ
タル終審ノ裁判言渡ヲ取消サント願フ時ハ
前條ニ記スル如ク其願書ヲ簿冊ニ登記シタ
ル外其願書ヲ三日内ニ相手方人即チ被告ニ送
達ス可シ
其相手方現ニ禁錮ヲ受クル時ハ書記官其願
書ヲ讀聽カセ其相手方之ニ姓名ヲ手署ス可
シ若シ姓名ヲ手署スルコトヲ欲セス又ハ之ヲ
知ラサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

又其相手方禁錮ヲ受クルコトナキ時ハ取消
願人其願書ヲ門監ニ托シ之ヲ相手方又ハ
其住所ニ送達セシム可シ但シ此場合ニ於テ
ハ路程ニ「ミ」リアメトトシ毎ニ一日ノ猶豫ヲ
加フ可シ

第四百十九條 ○民事ノ原告人裁判言渡ヲ取消
サント願フ時ハ諸書類ニ添ヘテ其裁判言渡
書ノ公正ノ寫ヲ差出ス可シ
其民事原告人ハ百五十円ヲシテノ金高^{罰金}供
モルヲ官署ニ預ル可シ若シ又抗辯ニテ言渡

ヲ受ケタル時ハ其半高ヲ官署ニ預ク可シ但
シ其金高ヲ預ケサル時ハ取消願ヲ為ス可ク
ラス

第四百二十條○左ノ數人ハ罰金ヲ出スニ及ハ
ス取消願、上員訴訟
トナル時ヲ云フ

第一○重罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル者

第二○行政、事務ニ付キ又ハ官、歳入或
ハ官、土地、事務ニ付キ取消願ヲ為ス

總テ其他ノ者ハ取消願ハ上員訴訟トナル時
入官吏

罰金ヲ言渡サル可シ然レ其取消ノ願書ニ
添ヘ左ノ書類ヲ出ス者ハ其金高罰金ニ供ス
高ヲ預クルニ及ハス

第一○六ツラニ以下、税銀ヲ出ス者ヲ

証スル租税目録、校書又ハ全ク税銀ヲ
免レタル旨ヲ証スルコトムニユルニ、税官

受合書

第二○住所、コトムニユルニ、マイル又ハ其

補佐ヨリ渡シスルアレハシ檢印シテ

兼諾ニタル貧困ノ受合書

第四百二十一條○重罪ハ言ヲ待タズ、輕罪又ハ
註誤ノ事ニ付キ、禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者
ハ、現ニ禁錮ヲ受ケタル時、又ハ保證ヲ立テタ
ル上ニテ、赦宥ヲ得タル時ニ非サレハ、取消願
ヲ為ス可カラス。

此場合ニ於テハ、其取消ノ願書ニ添ヘ、其禁錮
ノ證書、又ハ保證ヲ立テタル上ニテ、赦宥ヲ得
タル證書ヲ差出ス可シ。
然レモ裁判所ノ管轄異ナリタルヲ以テ、取消
ヲ願ハントスル時ハ、之ヲ願フ者、現ニ覆審院

所在ノ地ノ裁判所附獄舎ニ入りタルヲ証ス
立ルノ事ニテ、其願ヲ為スヲ得可シ、但シ其
獄監ハ願人ヨリ「^ア」^ロキユリルセ子ラルニ差
出シテ、「^ア」^ロキユリルセ子ラルノ檢印セシ願
書ヲ檢視タル上ニテ、其願人ヲ受取り、獄舎ニ
入ル、^アヲ得可シ。

第四百二十二條○刑ヲ言渡サレシ者、又ハ民事
原告人ハ、言渡ノ取消願ヲ為シタル時、又ハ其
時ヨリ十日内ニ、嘗テ其言渡ヲ為シタル裁判
所ノ書記局ニ、其取消ヲ求ムル憑據書ヲ差出

不可レ○書記官ハ其受取證書ヲ渡シタル上
直チニ其憑據書ヲ「ニステールビュバリ」
ニ送ル可シ

第四百二十三條○取消願ヲ為シタルヨリ十日
ノ後「ニステールビュバリ」ヨリ裁判事
務執政ニ吟味ニ管シタル諸書類ト願人ヨリ
既ニ取消願ノ憑據書ヲ差出シタルト於テハ
其憑據書トヲ送呈ス可シ
取消ヲ願フ裁判言渡ヲ為シタル裁判所ノ書
記官ハ諸書類ノ目錄ヲ無税ニテ記シ之ヲ其

書類ニ添フ可シ若シ此規則ニ違フ時ハ書記
官覆審院ヨリ百「カ」ヲシテ罰金ヲ言渡サル
可シ

第四百二十四條○裁判事務執政ハ諸書類ヲ受
取リ如ルヨリ二十四時間内之ヲ覆審院ニ送
リ且之ヲ送呈セシ官吏ニ其旨ヲ告知ス可シ
又刑ヲ言渡サレシ者ハ其取消ノ願書並ニ裁
判言渡書ノ寫及ヒ憑據書ヲ直チニ覆審院ノ
書記局ニ出ス「カ」ヲ得可シ然レモ民事原告人
ハ覆審院ノ代言人ノ世話ヲ得ルニ非サレハ

此條ニ記スル規則ノ如ク執行ヲ可カラス

第四百二十五條○重罪輕罪註誤ヲ別チ各總テ

裁判言渡ノ取消ヲ願出シタル時ハ覆審院ニ

テ此章前ニ余ニ記スル期限ノ終リシ時直テ

ニ其願ニ付キ裁判ヲ言渡シ又ハ其期限ノ終

リシ時ヨリ遅クトモ一月内ニ其裁判ヲ言渡

ス可シ

第四百二十六條○覆審院ニテハ預メ取消願ヲ

取上クルヲ允許スルニ及ハズ或テ其願ヲ

棄却シ又ハ裁判言渡ヲ取消ス可シ

第四百二十七條○覆審院ニテ輕罪裁判所又ハ

註誤裁判所ノ言渡ヲ取消ス時ハ其言渡ヲ為

シタル裁判所ト同等ノ裁判所自其吟味ヲ移

ス可シ

第四百二十八條○覆審院ニテ重罪ニ當シタル

言渡ヲ取消ス時ハ次ノ七條ニ記スル如ク處

置ス可シ

第四百二十九條○覆審院ニテ左ノ裁判所ニ吟

味ヲ移スルヲ言渡ス可シ

第二百九十九條ニ記シタル原由ニ付キ言

渡ヲ取消ス時ハ裁判所ノ官轄ヲ定メ、即ち
ノ重罪裁判所ニ被告人犯罪且重罪ヲ犯シ
旨ヲ告ク可キノ言渡ヲ云々
タリト告ク可キ旨ヲ言渡シタルヨリ以外
ノ上等裁判所重罪取
重罪裁判所ノ言渡ヲ取消シ又ハ吟味ノ手
続ヲ取消シタル時ハ其言渡ヲ為シタル以
外ノ重罪裁判所

第四又民事ノ官ニ管スル箇條ニ付キ裁判言渡
又ハ吟味ノ手續ヲ取消ス時ハ其下吟味掛
第四裁判後ノ在ル裁判所ヨリ以外ノ下等裁

判所但し此場合ニ於テハ預メ和辭ノ式ヲ
行フナク真ニ下等裁判所ニテ吟味ノ
手續ニ取掛ル可シ
若シ裁判所ノ官轄異ナリタルヲ以テ其裁
判言渡又ハ吟味ノ手續ヲ取消ス時ハ覆審
院ヨリ相當ノ裁判所ヲ指示シ其裁判所ニ
吟味ヲ移ス可シ若シ最初下吟味ヲ為シタ
ル裁判後ノ在ル下等裁判所ニ其吟味ヲ移
スル相當ナルヲアリト雖モ其裁判所ニ移
ス可カラズ其他ノ下等裁判所ニ其吟味ヲ

移ス可シ

又被告人刑ヲ言渡サレタルト雖モ法律上

ニテ其申立ラレシ所為ヲ罪犯ナリト為サ

サルニ因リ其刑ノ言渡ヲ取消ス時民時ノ

原告人アルニ於テハ其下吟味掛リ裁判後

ハ在ル裁判所ヨリ以外ノ下等裁判所ニ其

吟味ヲ移ス可シ若シ又民事ノ原告人アル

其此時ハ別段其吟味ヲ移スニ及ハス

第四百三十條○覆審院ニテ吟味ヲ移ス可キ裁

判所ヲ撰定ス可キ時ハ取消言渡ヲ為シタ

ル後直ニ其裁判役會議ノ室ニテ其撰定ノ高

議ヲ為ス可シ但其高議ハ決定ニ及バズ

取消言渡書ニ附記ス可シ

第四百三十一條○覆審院ヨリ吟味ヲ移ス言渡

アリシニ因リ其吟味ヲ為ス可キ下吟味掛リ

裁判役ヲ定ムルニハ言渡ノ取消トナリシ重

罪裁判所又ハ上等裁判所ノ管轄内ノ裁判役

中ヨリ之ヲ撰ム可カラス

第四百三十二條○覆審院ヨリ上等裁判所ニ吟

味ヲ移シタル時ハ其上等裁判所ニテ當然為

不可キ吟味ノ手續ヲ為シ終リタル後別段指
定メタル其管轄地内ノ重罪裁判所ニ其裁判
ヲ移ス可シ

第四百三十三條○覆審院ヨリ重罪裁判所ニ吟
味ヲ移シタル時未タ罪犯ノ告訴ヲ受ケサル
同罪人アルニ於テハ重罪裁判所ヨリ下吟味
掛リ裁判後ヲ指定メテ口キユトル也子テ止
ヨリ其代役ヲ指定メテ其下吟味ヲ為サシメ
然ル上ニテ諸書類ヲ上等裁判所ノ重罪取調
局ニ送り其局ニテ被告人重罪ヲ犯シタルト

告ク可キヤ否ヲ定ム可シ

第四百三十四條○法律上ニテ定ムル所ノ刑ト
重罪裁判所ノ言渡シタル刑ト相異ナルニ因
リ其刑ノ言渡ヲ取消ス時ハ其吟味ヲ移シテ
ル重罪裁判所ニ於テ以前ノ裁判所ニテ嘗テ
倍審ノ為ニタル決析書ニ循ヒ其言渡ヲ為ス
可シ

又更ニ他ノ原由ニ付キ刑ノ言渡ヲ取消ス時
ハ其吟味ヲ移シタル重罪裁判所ニテ更ニ
論^理ヲ為サシム可シ
證人ヲ呼出シ且更ニ陪審
ヲ集會セシメテ其決析ヲ

為サシム
ルヲ云フ

重罪裁判所ノ言渡中ノ一部ノ規則ニ背キ
タル時ハ覆審院ニテ其一部ノミヲ取消ス可
シ

第四百三十五條○刑ノ言渡ノ取消ヲ得タルト

雖モ更ニ重罪ノ裁判ヲ受ク可キ者ハ之ヲ禁

錮シタル儘ニテ上等裁判所又ハ重罪裁判所

移シ或ハ召捕言渡書ニ循ヒ之ヲ召捕ヘ云

上等裁判所又ハ重罪裁判所ニ移ス可シ

第四百三十六條○重罪輕罪註誤ノ別ナク民事

原告人取消願ヲ為シ負訴訟トナル時ハ赦

宥ヲ得タル被告人ニ對シ百五十フランクノ

償ヲ為シ且其被告人ノ裁判所費用ヲ償ヒ並

ニ百五十フランクノ罰金ヲ官ニ納ム可シ但

○以前枕傳シテ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其

罰金ノ高ヲ七十五フランクトス第四百十
九條見合

官署又ハ官吏ハ取消願ノ上負訴訟トナリシ

時相手方ヘノ償ヲ為シ且其裁判所費用ヲ

償フノミトス第四百二
十條見合

第四百三十七條○取消願ヲ為シ覆審院ニテ其

合セテ三百フランク

願ノ如ク取消ヲ為ス時ハ其取消ノ言渡ノ文
面如何ナルヲ問ハス其願人ニ嘗テ其官署ニ
預テ置キタル金高ヲ直ニ還ス可シ但シ其
取消ノ言渡ノ文面ニ其金高ヲ還ス可キヲ
別段記セサル時ト雖モ亦同一ナリトス

第四百三十八條〇一度取消ノ願ヲ為シ頁訴訟
トナリタル上ハ其願人如何ナル憑據及ヒ口
実アリト雖モ再ヒ其言渡ヲ取消サント願フ
可カラズ

第四百三十九條〇取消願ヲ棄却スル覆審院ノ

言渡ハ書記官之ヲ拔書ニ為シ姓名ヲ手署シ
テ三日内ニ覆審院ノ「プロキュールゼ子ラル」
ニ送り「プロキュールゼ子ラル」之ヲ裁判
事務執政ニ送呈シ其執政ヨリ其取消ヲ願フ
裁判言渡ヲ為セシ裁判所ノ「ミニステールピュ
ブリック」之ヲ送ル可シ第三百七十
五條見合
第四百四十條〇一度覆審院ニ願出テ裁判言渡
ノ取消ヲ得タル後更ニ再度ノ裁判言渡ヲ取
消サント覆審院ニ願出ル時ハ千八百七年第
九月十六日ノ法律ヲ以テ定メタル規則ニ循

處置ス
可シ

第四百四十一條○覆審院ノ「アロキユリ」トルゼ子
ラル裁判事務執政ヨリ受取リタル命令書ヲ
示シテ覆審院ノ刑事局ニ裁判所ノ書類又ハ
裁判言渡書ノ法律ニ背キタル旨ヲ申立ル時
ハ其書類又ハ裁判言渡書ヲ取消シ別段ノ道
理アル時ハ司法警察官吏又ハ裁判役此篇第
四卷第三章ニ記スル如ク犯罪ノ訴ヲ受テ可

第四百四十二條○上等裁判所又ハ重罪裁判所

又ハ輕罪裁判所又ハ誣誤裁判所アリ終審ノ
裁判言渡ヲ受テ其言渡ヲ取消シ願出ルヲ
得可キ場合ニ於テ定期内ニ其願ヲ為ス者ナ
キ時ハ既ニ定期ノ終リタルト否トテ問ハス
覆審院ノ「アロキユリ」ルゼ子ラシ自己ノ職務
ヲ以テ其取消ノ旨ヲ覆審院ニ申立テ其言渡
ヲ取消サシムルヲ得可シ但シ其取消ヲ願
ハサル者ハ其言渡ノ取消トナリシ旨ヲ申立
テ其言渡ノ如ク執行フヲ拒ム可ラス
第四章第三章○裁判調直ノ事

第四百四十三條の第八百六十七年第六月廿九日左ノ如ク改シ重罪ト輕罪トヲ問ハス然テ裁判所ノ言渡ニ付キ左ノ場合ニ於テハ調直ヲ願フコトヲ得可シ

第一〇人ヲ殺害シタル罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル後嘗テ死シタルト為セシ人其實存命ナリト思料シ得可キ十分ナル憑據アル時

第二〇輕罪又ハ重罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル後他人同一ノ事ニ付キ更ニ刑ヲ言

渡サレ其二箇ノ言渡相觸ルハ因リ其中一方ノ者無罪ナルノ証ト為ス可キ時

第三〇吟味ノ席ニ出テ證ヲ申述ヘシ証人中ノ一人被告人刑ノ言渡ヲ受ケシ後其被告人ニ對シテ偽證ヲ述ヘタル訴ヲ受ケ刑ヲ言渡サレタル時〇斯ノ如ク刑ヲ言渡サレシ証人ハ後ノ吟味ノ時更ニ其申述ヲ聽ク可カラス

第四百四十四條の(千八百六十七年第六月廿九日左ノ如ク改シ)裁判言渡ノ調直ヲ願フ可キ

権ハ左ノ数人ニ於リトス

第一〇裁判事務執改

第二〇刑ヲ言渡サレタル者

第三〇刑ヲ言渡サレタル者ノ死シタル後

ハ其配偶者、子孫、血属ノ親、其財産全部ノ

遺囑ノ贈遺ヲ受ケタル者、又ハ其財産一

部ノ遺囑ノ贈遺ヲ受ケタル者、刑ヲ言渡

サレタル者ヨリ刑段各代ノ権ヲ授カリ

シ者

輕罪ニ付テハ禁錮ノ刑ヲ言渡サレ、又ハ改権

民権、旗權ノ全部又ハ一部ヲ奪フ可キ刑ヲ言

渡サレタル時ニ非サレハ、裁判調直ヲ願フ可

クカラス、〇裁判事務執改ハ自己ノ公務ヲ以テ

アロキユリユトルゼ子ラシニ命令書ヲ典へ、又ハ

願人ノ求メニ因リ其命令書ヲ典へ、アロキユリ

トルゼ子ラシラシテ覆審院ノ刑事局ニ其調

直ヲ求メシム可シ、〇前條ノ第二及ヒ第三ノ

場合ニ於テハ願人其相觸ル、二箇ノ言渡中、

後ノ言渡アリシヨリ二年内、又ハ偽証ヲ述へ

シ證人ノ刑ヲ言渡サレタルヨリ二年内ニ其

調直ノ願書ヲ裁判事務執政局ニ差出スニ非
サレハ之ヲ取止ク可カラス○何レノ場合ニ於
テモ覆審院ノ言渡アルニ至ル迄ハ裁判事務
執改ノ命令ニ因リ裁判言渡即チ調直ヲノ執
行ヲ止メ又其後ハ覆審院ニテ調直ノ願ヲ取
止クルヲ先許スル言渡ニ因リ其裁判言渡
ノ執行ヲ止ム可シ

第四百四十五條○(千八百六十七年第六月廿九

日左ノ如ク改シ覆審院ニテ裁判言渡調直ノ
願ヲ取止ケタル時其事件取調ノ手續未タ十

分ニ済サルニ於テハ覆審院ニテ其事件本案
ノ取調証人及ヒ其他ノ者ノ對理ノ吟味人違
有無ノ取調及ヒ其他事實ヲ知リ得可キ尙ハ
等ヲ為シ又ハ他ノ裁判所ニ任シテ之ヲ為サ
シム可シ○又其事件取調ノ手續既ニ十分済
タル時刑ヲ言渡サレタル者ト其証人及ヒ其
他管係アル者トヲ更ニ相對シテ辨論セシム
ルヲ得可キニ於テハ覆審院ニテ刑ノ言渡
ヲ取消シ及ヒ其他調直ノ妨ケトナル可キ諸
件ヲ取消シテ其罰外ス可キ箇條ヲ定メ其刑

ヲ言渡サレタル者其刑ヲ言渡シタルヨリ
以外ノ裁判所ニ移ス可シ。○倍審ノ決断ニ任
カス可キ事件ニ重罪ヲニ付テハ覆審院ヨリ吟
味ヲ移シタル上等裁判所ノアロキモトルゼ
子ラシ更ニ重罪告訴状ヲ記ス可シ。

第四百四十六條。○(千八百六十七年第六月二十
九日左ノ如ク改メ)刑ヲ言渡サレタル者ト証
人及ヒ其他管係アル者トテ相對シテ辯論セ
シタル下ニ得サル時殊ニ刑ヲ言渡サレタル
者ト死シ又ハ抗傳シタル時又ハ刑トカレズ

クリヤ^{シヨシ}ノ期限ニ至リシ時ハ覆審院ニテ
相對シテ辯論ヲ為サシムルヲ得サレ旨ヲ
認セシ上ニテ預メ刑ヲ言渡ヲ取消ス及ハ
ス又他ノ裁判所ニ吟味ヲ移スニ及ハスニテ
民事ノ原告人アル時ハ其原告人ト死者ノ為
メ覆審院ヨリ任シタルキ^{世話}トノ
面前ニテ本案ノ裁判ヲ為ス可シ。○此場合ニ
於テハ覆審院ニテ不當ナル刑ノ言渡ヲ取消
シ又別段ノ道理アル時ハ死者ト罪ヲ申雪ス
ル言渡ヲ為ス可シ。八百六十六年六月廿九日

第四百四十七條の~~第~~八百六十七年第六月廿九
日左ノ如ク改シ第四百四十三條ノ第一ノ場
合ニ於テ、刑ノ言渡ヲ取消シタル上、其犯人ニ
重罪並ニ輕罪ノアラサル時ハ、覆審院ヨリ他
ノ裁判所ニ吟味ヲ移スニ及ハス。

假リノ規則

此治罪法ヲ布告スル前ニ、第四百四十三條ノ
第二及ヒ第三ニ徇ヒ、調直ヲ願フテ得可キ
刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ、此法布告ノ時ヨリ、
第四百四十四條ニ記シタル調直ノ願書ヲ差
出ス可キ期限ヲ算フ可シ。

第四百四十八條
第四百四十九條
第四百五十條
第四百五十一條
第四百五十二條
第四百五十三條
第四百五十四條
第四百五十五條
第四百五十六條
第四百五十七條
第四百五十八條
第四百五十九條
第四百六十條
第四百六十一條
第四百六十二條
第四百六十三條
第四百六十四條
第四百六十五條
第四百六十六條
第四百六十七條
第四百六十八條
第四百六十九條
第四百七十條
第四百七十一條
第四百七十二條
第四百七十三條
第四百七十四條
第四百七十五條
第四百七十六條
第四百七十七條
第四百七十八條
第四百七十九條
第四百八十條
第四百八十一條
第四百八十二條
第四百八十三條
第四百八十四條
第四百八十五條
第四百八十六條
第四百八十七條
第四百八十八條
第四百八十九條
第四百九十條
第四百九十一條
第四百九十二條
第四百九十三條
第四百九十四條
第四百九十五條
第四百九十六條
第四百九十七條
第四百九十八條
第四百九十九條
第五百條

書ニ記シ又其書類ヲ差出シタル者其毎葉ニ
姓名ヲ手署シ且横線ヲ畫ス可シ若シ其者姓
名ヲ手署スルコトヲ知ラサル時ハ其旨ヲ附記
ス可シ○書記官此等ノ法式ヲ行ハスレテ其
書類ヲ受取リタル時ハ五ノコトヲ行ハスルノ罰金
ヲ言渡サル可シ

第四百四十九條○若シ贋造ナリト述ボル書類
ヲ公ケテ預リ役所ヨリ取出シタル時ハ之ヲ
渡シタル官吏亦前條ニ記スル如ク其書類ニ
姓名ヲ手署シ且横線ヲ畫ス可シ若シ此規則

ニ背ク時ハ五十コトヲ行ハシメ罰金ヲ言渡サル
可シ

第四百五十條○又贋造ナリト訴フル書類ハ司
法警察ノ官吏ニ姓名ヲ手署シ又民事ノ原
告人又ハ其代書師出席スル時ハ此等ノ者亦
之ニ姓名ヲ手署ス可シ
被告人モ亦出席シタル時其書類ニ姓名ヲ手
署ス可シ
若シ此等ノ者姓名ヲ手署スルコトヲ得ス又ハ
手署スルコトヲ欲セサル時ハ其旨ヲ調書ニ附

記ス可シ

書記官此條ノ規則ニ背ク時ハ五十ヲラシク

ノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百五十一條○書類ヲ以テ裁判ノ所為又ハ

民事ノ所為ノ根拠ト為シタル時ト雖モ其後

直チニ其書類ノ贋造タルヲ申立ルコトヲ得可

シ

第四百五十二條○贋造ノ旨ヲ申立テタル書類

ノ公シノ預リ人又ハ私ノ預リ人ハ三ニステ

トルビユアリツクノ言渡書又ハ下吟味掛リ裁

判役ノ言渡書ニ循テ其預ル所ノ書類ヲ差出

ス可シ若シ之ヲ差出サハル時ハ召捕ヲ受ケ

テ可シ

其言渡書及ヒ書類差出シテ証書アル時ハ其

預リ人其書類ニ管係アル者ニ對シ既ニ之ヲ

差出シタルノ証アリトス可シ

第四百五十三條○照徴ノ為ノ差出シタル書類

モ亦才四百四十八條才四百四十九條才四百

五十條ニ記スル如ク姓名ヲ手署シ及ヒ横線

ヲ畫ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ此數條ニ

記スル所ノ罰金ヲ言渡サル可

第四百五十四條○総テ公ケノ預リ人ハ其預ル

所ノ書類ヲ照徴ノ為ノ差出ス可シ若シ之ヲ

出サシムル時ハ召捕ヲ受ク可シ○之ヲ差出ス

可キノ言渡書及ヒ差出シノ証書アル時ハ其

預リ人其書類ニ管係アル者ニ對シ既ニ之ヲ

差出シタルノ証アリトス可シ

第四百五十五條○公正ノ証書類ノ正本ヲ差出

ス可キ事ノ必要ナル時ハ其地ノ下等裁判所

ハ上席人其証書ノ正本ト護合セタル上真正

ニシテナリト認メタル其寫ヲ其預リ人ノ方

ニ遺置テ可シ但シ上席人ハ其旨ヲ調書ニ

記ス可シ○其預リ人官吏タル時ハ其正本ハ

還所来ルニ至ル迄其寫ヲ正本ニ代用シ其寫

ヨリ更ニ寫シタル副本ヲ渡ス事ヲ得可シ但

シ其預リ人ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ訴訟法
才二百

三
合
見然レモ其公正ノ証書ノ簿冊中ニ登記シタル

ニ因リ一時之ヲ引離シテ差出スルヲ得サル

時ハ裁判所ヨリ其簿冊ヲ差出ス可キトシ言

渡し前記スル手續ヲ行ス可キ義務ヲ釋放
スルヲ得可也

第四百五十六條○私ノ証書ト雖照徴ノ為メ
之ヲ差出サレメ双方之ヲ認ムル時ハ照徴ノ
用ニ供スルヲ得可也
私ノ預リ人其証書ヲ預ル時ハ縱令自カラ之
ヲ預リ居ル者ヲ述べタル時ト雖照徴其証書ヲ
差出サレメ因リ直チ之ヲ召捕ス可カラ
不然レモ証書ヲ出サレ付キ裁判所ニ呼
出サレタル上之ヲ出サレ照徴ノ受ケ終

負訴訟トナリタル時ハ其裁判官渡書ニ其
者直チニ其証書ヲ出ス可ク若シ出サレメ
於テハ召捕ヲ可キ旨ヲ記スルヲ得可也
第四百五十七條○証入證書類ノ贋造ムルヤ否
ニ付キ証ヲ申述スル時ハ之ニ横線ヲ畫シ且
姓名ヲ手署ス可シ若シ手署スルヲ知ラサ
ル時ハ其旨ヲ調書ニ記ス可也
第四百五十八條○訴訟吟味ノ手續ヲ為ス間ニ
差出シタル証書ヲ一方ヨリ贋造ナリト申立
ル時ハ相手方ヲシテ其証書ヲ用ニト欲スル

ヤ否ヲ答ヘシム可シ 訴訟法才二百十五條見合

第四百五十九條〇相手方ニテ其證書ヲ用ヒス

ト答フル時又ハ相手方八日内ニ其答ヲ為サ

サル時ハ其證書ヲ棄却シ吟味ノ手續及ヒ裁

判言渡ニ取掛ル可シ

若レ又相手方其證書ヲ用ヒレト欲スル者ハ

答フル時ハ其吟味手續ヲ為ス裁判所ニテ附

帶ノ訴訟ト為シ其贋造ノ訟ヲ吟味ス可シ 訴訟

法才二百十五條以下ノ規則

第四百六十條〇若シ証書ノ贋造タルヲ申立ル

者ヨリ其証書ヲ出シタル者即チ其贋造ノ主

謀或ハ附従タルヲ述フル時又ハ吟味手續ニ

因リ贋造ノ主従タル者猶生存且未キ其罪

及ハシタルヲ示シテ期限ニ至ラザルニテ

業知リ得タル時ハ此章ニ記スル如ク主タル訴

訟トシテ其罪ヲ申立ツ可シ 即チ治罪法ノ規則ニ依リ贋造ノ証書ヲ用ヒタル者ハ其罪ヲ認ムルニ至ラザルニテ

此場合ニ於テ民事ノ訴訟ナル時ハ贋造訴訟

ノ裁判アルニ至ル迄民事ノ訴訟ノ裁判ヲ延

延ス可シ 訴訟法才二百十五條見合

民事ノ訴訟ノ裁判ヲ延

又重罪輕罪註誤ニ付テノ刑事ノ訴訟アル時
ハ裁判所ニテラ^トニ^ニス^テールピユブリツクノ申
立ヲ聴キタル上賈造訴訟ノ裁判アルニ至ル
迄其刑事ノ訴訟ノ裁判ヲ延ハス可キヤ否ヲ
預メ決斷ス可^レト訴訟法才二百五
十條見合
第四百六十一條○被告人賈造訴訟ハ裁判所ニテ
文字ヲ手記ス可キノ求メテ受ク可^レト若^レ其
求メテ肯セズ又ハ黙^ニ居タ^ル時^ニ其旨ヲ調
書^ニ記^ス可^キト和手録
第四百六十二條○若^シ裁判所ニテ刑事又ハ民

事ノ訴訟ヲ吟味スル時賈造ノ憑據ト賈造ヲ
為^シタ^リト思料ス可キ人ニ付テハ憑據トシ
見出^シタル時^ニステールピユブリツク又
ハ裁判所ノ上席人ヨリ其賈造ヲ為^シタルト
思料ス可キ地又ハ其疑ヲ受ケタル者ノ所在
ノ地ノ下吟味掛リ役所ノカ^レロキユリ^トルセ^テ子
ラ^ルノ代役ニ其書類ヲ送ル可^レト但^シ其^レニ
ステールピユブリツク又ハ裁判所ノ上席人ハ
其疑ヲ受ケタル者ニ對^シテ引出狀ヲ出^ステ^ラ
得^ル可^キト

第四百六十三條○若し公正ノ証書ノ全部又ハ
一部ノ贋造タルトテ言渡シタル時ハ其言渡
ヲ為シタル裁判所ヨリ其証書中故ラニ塗抹
シタル所アラハ之ヲ書加ヘ又故ラニ書加ヘ
タル所アラハ之ヲ塗抹シ又ハ其証書ヲ改メ
記ス可キトテ言渡ス可シ
照徴ノ書類ハ之ヲ持来リテ官署ニ返シ又ハ
之ヲ出シタル者ニ返ス可シ但し此事ハ裁判
言渡ヨリ十五日内ニ之ヲ為ス可ク若し書記
官此規則ニ違フ時ハ五十ノ外ノ罰金ヲ
言渡サレ可シ

第四百六十四條○其他贋造訴訟ノ吟味手續ハ
他ノ犯罪訴訟ト同一ナリトス但し此条ニ記
スル所ハ其例ス非ス
重罪裁判所ノ上席人ヲロキユリユトルセテラル
又ハ其代役下吟味掛リ裁判役治安裁判役ハ
其管轄地外ト虽氏国債ノ手形バンクドフラ
ンクノ手形又ハ其他ノバンクノ手形贋造
シ又ハ輸入シ又ハ配介シタルノ疑アル者ア
ル時其住居ニ至リ穿鑿ヲ為ス可ク得可シ

貨幣質造ノ罪又ハ國璽質造ノ罪ニモ亦此条ノ規則ヲ通シ用フ可レ

第二章〇重罪被告人抗傳ヲ為ス事

第四百六十九條〇重罪取調局ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キ言渡ヲ為シタル後被告入ヲ召捕フルトヲ得サル時又ハ其住所ニ其言渡書ヲ送りタルヨリ十日内ニ裁判所ニ出テサル時又ハ一度裁判所ニ出テ又ハ召捕ヘラレタル後逃亡タル時ハ重罪裁判所ノ上席人又其アラサル時ハ下等裁判所ノ上席

人又其アラサル時ハ下等裁判所ノ裁判役中ニテ最モ先キニ職ニ任セラレタル裁判役ヨリ其被告人十日内ニ出席ス可ク若シ出席セサル時ハ法律違背ノ罪アルニ因リ其民権ヲ奪ヒ抗傳吟味ノ時間其財産ヲ官ニ預カリテ其時間總テ裁判所ニ訴出スルヲ禁シ且如何ナル人タルヲ問ハス其被告人ノ居所ヲ知ル者アラハ之ヲ申出ツ可キ者ヲ言渡ス可レ其言渡書ニハ被告人ノ申立テラレシ罪犯ト其召捕ヲ為ス可キ旨トヲ記ス可レ

第四百六十六條○其言渡書ハ次日曜日ニ喇叭ヲ吹キ又ハ大鼓ヲ鳴ラレテ之ヲ公布ス且其言渡書ヲ被告人住所ノ門ト「メ」イ此ノ官署ノ門ト重罪裁判所ノ訟庭ノ入口トニ貼附ス可也
何口キユリユルゼ子ラ此又ハ其代役ハ其被告人住所ノ記録税官署ノ支配人ニ其言渡書ヲ送ル可也
第四百六十七條○十日ノ期限ノ後ニ至リ抗傳者ノ裁判言渡ヲ為ス可也

第四百六十八條○代言人又ハ代書師ハ抗傳トスル被告ノ權利ヲ保護スル為メ出席スルヲ得ス
若シ被告人歐羅巴ニ在ル仙蘭西ノ領地外ニアル時又ハ被告人裁判所ニ出ルヲ能ハサル時ハ其親族又ハ朋友其被告人ノ為メ辯解ヲ為シ且其辯解スル所正當ナル旨ヲ述フ可也
第四百六十九條○重罪裁判所ニテ被告人ノ親族又ハ朋友ノ辯解スル所ヲ正當ナリトスル

時々其模様ト其居ル地ノ遠近トニ從ヒ別段
決定メタル時間被告人ヲ抗傳ノ終裁判スルヲ
ヲ延ハシ其財産ヲ官ニ預カルトモ亦之ヲ延
ハス可シ

第四百七十條。前記スル場合ノ外ハ直ニ

重罪取調局ヨリ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス

言渡書抗傳者ヲシテ出席セシムルハ可シ

渡書才四
記スル
百六十五
条其言渡書ヲ公布シ及ヒ

貼附シ各ル旨証書及調書ヲ誌上ス可シ

其誌上ヲ為シタル後重罪裁判所ニテ

リユールゼラルル又ハ其代役ノ申立ヲ聽キ

ル上抗傳ノ事ニ付キ言渡ヲ為ス可シ

若シ下吟味手續ノ中ニ法律ニ及キタル事

ル時ハ重罪裁判所ニテ之ヲ取消シ其取消ト

為シタル手續ヨリ後ノ総テノ手續ヲ更ニ改

メテ為サシム可シ

下吟味ノ手續法律ニ及キタル事ナキ時ハ重

罪裁判所ニテ重罪告訴狀ニ付キ裁判言渡ヲ

為シ且民事原告人ノ求ムル損失ノ償ヲ言渡

ス可シ但シ此場合ニ於テハ信番ノ立會及ヒ

決斷ヲ要スルヲナシ

第四百七十一條○抗傳者刑ヲ言渡サレシ時ハ

其言渡ノ如ク執行シテ其時ヨリ其

財産ヲ失踪者ノ財産ト同視シテ之ヲ支配シ

被告ノ抗傳シテ受ケタル刑ノ言渡ヲ取消シ

得可キ期限ノ終リタルニ因リ其刑ノ言渡ノ

確的トナリタル後其相続人ニ其財産支配ノ

算計ヲ為ス可シ民法第百八條見合

第四百七十二條○(千八百五十年第一回二日左

ノ如ク改ム)抗傳者ノ刑ノ言渡書ハ其言渡ヨ

リ八日以内ニプロキユリユルゼキラル又ハ其代

表役ノ申立ニテ抗傳者最終ノ住所ノコトハト

マシノ新聞紙ニ記入ス可シ○又其言渡書ハ

抗傳者最終ノ住所ノ門及ヒ罪犯ヲ行フタル

カレロシテ首邑ノ官署ノ門並ニ重

罪裁判所ノ訟庭ノ入口ニ貼附シテ公示ス可

シ○又同上ノ期限内ニ其言渡書ノ寫ヲ抗傳

者住所ノ記録税官署ノ支配人ニ送ル可シ○

法律上ニテ抗傳者ノ受ケル刑ノ言渡書ヲ公

示シタルヨリ生ス可キテ定メタル諸件ハ

此条ニ記スル公示ノ式ヲ行ヒ終リル旨ヲ証
スル最終ノ調書ヲ記シタル日ヨリ以來其効
アリトス 民法才二十
六条見合

第四百七十三條○プロキユリユールセチラル及ヒ
民事原告人ノ外ハ被告人抗傳レテ受ケタル
言渡ヲ取消サント覆審院ニ願出ツ可カテス
但シ民事原告人ハ其民事ニ管レタル条件ノ
ミニ付キ其取消ヲ願フトヲ得可キ言渡書ハ
第四百七十四條○如何ナル場合ニ於テモ被告
人中ノ一人抗傳スト雖モ出席シタル他人被

告人ノ吟味ヲ當然遲延ス可カラス
裁判所於テハ出席シタル被告人ノ裁判言
渡ヲ為シタル後嘗テ犯罪ハ憑據ホリトシテ
書記局ニ納メタル諸物件ヲ其所有者又ハ其
代權人ノ願ニ從ヒ還ス可キトヲ言渡スヲ得
可シ○又別段ノ道理アル時ハ裁判所ニ於テ
其所有者又ハ其代權人ヲシテ入用次第早速
其物件ヲ再ヒ裁判所ニ出ス可キノ盟約ヲ為
サシメタル上ニテ其物件ヲ還ス可キトヲ言
渡スヲ得可シ

其物件ヲ還ス前ニ書記官其物件ノ模様ヲ調
書ニ記ス可シ若シ書記官其調書ヲ記セサル
時ハ百^フラシ^シノ罰金ヲ言渡サル可シ
第四百七十五條○抗傳者ノ財産ヲ官ニ預カ
時間其婦子父母等貧困ナル時ハ其扶助料ヲ
給スルヲ得可シ

其扶助料ノ高ハ行政官署ニテ之ヲ定ム可シ
第四百七十六條○抗傳ニテ刑ヲ言渡サレシ被
告人其刑人^トアレズク^リアレヨ^シ六期限^ニ至ラ
ザル中^ニ召捕^ヘラレ又ハ自訴スル時ハ其刑

ノ言渡並ニ其出席ヲ為ス可キ^ト言渡シタ
ルヨリ以後ノ手續ヲ若シ然取消シテ通常ノ規
則ニ循ヒ更ニ吟味ノ手續ヲ為ス可シ

然レモ抗傳ニテ受ケタル刑ノ言渡ニ因リ准
死ノ罰ヲ受ク可キ時其被告人言渡書公示ノ
日ヨリ五年ノ後ニ至リ召捕ヘラレ又ハ自訴
シタルニ於テハ其五年ノ期限ニ至リシ日ヨ
リ被告人ノ裁判所ニ出ル迄ノ時間准死ヨリ
生ス可キ諾件ノ効アル^ト民法第三十條ニ記
スル所ノ如クナリトス

第四百七十七條 ○若シ前條ノ場合ニ於テ事故
アリテ證人ヲ吟味ノ席ニ出テシムルハ能ハ
サル時ハ其証人ノ申述書ト同罪ヲ犯セシ他
ノ被告人ノ返答書トシテ吟味ノ席ニテ讀上ク
可シ又裁判所ノ上席人罪犯ノ事並ニ被告人
ノ事ニ付キ事實ヲ明瞭ナラシム可シト思料
スル所ノ證書類モ亦之ヲ吟味ノ席ニテ讀上
ク可シ

第四百七十八條 ○抗傳者後ニ裁判所ニ出テ重
罪ノ告訴ヲ免ルルハ、即チ無罪トシテアリ

ト雖モ其抗傳ニ因リ生シタル裁判所費用ヲ
擔當ス可シ

第三章 ○裁判役ノ其職務外ニテ犯シタ
ル罪及ヒ其職務ヲ行フニ當リ犯シタ
ル罪

第一款 ○裁判役ノ其職務外ニテ犯シ
タル罪ヲ告訴シ及ヒ吟味スル事

第四百七十九條 ○治安裁判役輕罪裁判所即チ
裁判ノ裁判役又ハ此等ノ裁判所ニテ「三」ニス
テ「一」ルビユブリツグノ職ニ居ル官吏其職務外

ニテ懲治刑ニ處セラルル可キ輕罪ヲ犯セシメ
申立ヲ受クル時ハ上等裁判所ノ「プロキユリ」ニ
ルセテラル其被告人ヲ上等裁判所ニ呼出シ
テ裁判言渡ヲ為サシム可シ但シ其言渡ハ之
ヲ控訴スルコトヲ許サス

第四百八十條。若シ又前條ニ記スル官吏施体
又ハ加辱ノ刑ニ處セラルル可キ重罪ヲ犯セシ
メ申立ヲ受クル時ハ上等裁判所ノ「プロキユリ」
トセテ司法警察ノ職ヲ行ス可キ官吏ヲ
指定ノ上等裁判所ノ上席人下吟味掛ヲ裁判

役ノ職ヲ行フ可キ官吏ヲ指定ム可シ

第四百八十一條。若シ上等裁判所ノ裁判役又
ハ上等裁判所ニテ「コ」ニステ「トル」ビ「ブ」リ「ツク」
ノ職ニ居ル官吏其職務外ニテ輕罪又ハ重罪
ヲ犯シタルノ申立ヲ受クル時ハ其申立ヲ聽
キタル官吏前條ニ記シタル如ク違延ナク其
下吟味ヲ為サシムル間ニ其申立書ノ寫ヲ裁
判事務執政ニ送呈シ並ニ其吟味ニ管シタル
書類ノ寫ヲ其執政ニ送呈ス可シ
第四百八十二條。裁判事務執政ハ其書類ヲ覆

審院ニ送り、覆審院ニテ被告人ニ罪アリト思
フ時ハ其吟味ヲ輕罪裁判所又ハ下吟味掛リ
裁判役ニ移ス可シ、但シ其輕罪裁判所又ハ下
吟味掛リ裁判役ハ被告人ノ在リニ上等裁判
所ノ管轄地外ノ者タル可シ、
又被告人ヲ重罪ヲ犯シタリト告ク可キ時ハ
覆審院ヨリ其被告人ノ在リニ以外ノ上等裁
判所ノ重罪取調局ニ之ヲ移ス可シ、
第四百八第二款○覆審院上等裁判所重罪裁判
所ノ裁判役ヲ除クノ外總テ其他ノ

裁判所ノ裁判役全負又ハ一負其職
務ヲ行フニ付キ職務冒瀆ノ罪及ヒ
其他ノ輕罪又ハ重罪ヲ犯シタルヲ
告訴シ及ヒ吟味スル事、
第四百八十三條○若シ治安裁判役、高法裁判所
ノ裁判役、司法警察ノ官吏、輕罪裁判所ノ裁判
役又ハ此等ノ裁判所ニテコトニステールビユブ
リツクノ職ニ居ル官吏其職務ヲ行フニ付キ、
懲治刑ニ處ス可キ輕罪ヲ犯シタルノ申立ヲ
受クル時ハ第四百七十九條ニ記スル如ク其

取テ告訴シテ之ヲ裁判ス可シ

第四百八十四條○若シ前條ニ記シタル官吏職
務冒瀆ノ重罪又ハ更ニ重キ罪ヲ犯シタルノ
申立ヲ受クル時ハ上等裁判所ノ上席人通常
下吟味掛リ裁判役ノ行フ職務ヲ行ヒ上等裁
判所ノプロキユリユールゼ子ラル通常プロキユリユ
ールアムニリアルノ行フ職務ヲ行フ可シ但
シ此等ノ官吏ハ別段ニ代テ職ヲ行フ可キ
官吏ヲ指定ムルコトヲ得可シ
其上席人及ヒプロキユリユールゼ子ラルヨリ別

段ニ代ル可キ官吏ヲ指定メサル間罪犯ニ
管シタル物件アル時ハ總テノ司法警察官吏
其物件ニ付テノ証ヲ立ツルコトヲ得可シ但シ
其他ノ吟味手続ハ沿革法中一般ノ規則ニ循
テ可シ

第四百八十五條○若シ高法裁判所或ハ輕罪裁
判所ノ裁判役全員其職務ヲ行フニ付キ職務
冒瀆以上ノ重罪ヲ犯シタルノ申立ヲ受クル
時又ハ上等裁判所ノ裁判役一員或ハ數員若
クハ上等裁判所ノプロキユリユールゼ子ラル或

申立テ其上席人其裁判役一頁ヲシテ覆審院
所在ノ地ニ於テ証人ノ申述ヲ聴カシム又ハ
其他ノ吟味手續ヲ為サシム可シ

第四百八十八條ノ若シ覆審院所在外ノ地ニ於
テ証人ノ申述ヲ聴キ又ハ其他ノ吟味手續ヲ
為ス可キ時ハ覆審院ノ上席人被告人タル裁
判役全員又ハ一頁ノ在ル判ハルトマシ又ハ
アルロニテスマシ外ノ下吟味裁^シ裁判役ヲ
シテ此等ノ諸事ヲ為サシム可シ
第四百八十九條ノ前條ニ記シタル下吟味裁^シ

裁判役ハ証人ノ申述ヲ聴キ且其他已レシ任セ
テレタル吟味ノ手續ヲ為シ終リタル後調査
及ヒ其他ノ書類ニ封印ヲ為シテ覆審院ノ上
席人ニ送ル可シ

第四百九十條ノ覆審院ノ上席人ハ裁判事務執
政ヨリ受取リタル書類又ハ申立人ヨリ差出
シタル書類又ハ其後得タル書類 下吟味ヲ為
サシメタル
書類ヲ檢視シタル上ニテ被告人ヲ禁錮ス
可シト思フ時ハ禁錮状ヲ出ス可シ
其禁錮状ニハ被告人ヲ繫ク可キ獄舎ヲ記ス

可シ

第四百九十一條の覆審院ノ上席人ハ直キニ其
吟味ニ管スル書類ヲ口ロキユトルセテラレ
ニ送り、口ロキユトルセテラレ五日内ニ覆審院
中ノ裁判言渡取消局ニ被告ノ犯罪申立ヲ
記スル求刑書ヲ出ス可シ

第四百九十二條の犯罪ノ申立書ヲ裁判言渡取
消局ニ出ス前ニ被告人ヲ禁錮シ、
ラ問ハス、其局ニテ、他人事務ヲ暫ク差置キ、其
犯罪ノ申立ヲ取上ク可キヤ、否ヲ裁判ス可シ

其局ニテ犯罪申立ヲ棄却スル時ハ被告人ハ
赦宥ス可シ
其局ニテ犯罪申立ヲ取上クル時ハ被告人ハ
ル裁判役全員又ハ一員ノ吟味ヲ覆審院ノ民
事局ニ移シ、民事局ニテ其被告ハ重罪ヲ犯シ
タリト告ク可キヤ否ヲ裁断ス可シ

第四百九十三條の既ニ覆審院ニ訴出シタル事
件ニ附帯シテ全上ノ犯罪申立ヲ為サントス
ル時ハ是迄ノ訴ニ管轄スル局ニ其申立ヲ為
ス可シ、但シ其局、刑事局又ハ裁判言渡取消局

タル時ハ其申立ヲ取上ケタル上ニテ其吟味
ラ民事局ニ移シ又是道ノ訴ヲ管轄スル局民
事局タル時ハ其吟味ヲ裁判言渡取消局ニ移
ス可シ

第四百九十四條〇覆審院中ノ一局ニテ裁判役
ニ對シ損失ノ償ヲ要ムル訴又ハ總テ其他ノ
訴ヲ吟味スル時主タル申立ト附帶ノ申立ト
ヲ問ハス裁判役ノ犯罪申立書ヲ差出ス者ナ
シト虽モ第四百七十九條ニ記スル裁判役全
員又ハ一員ニ罪犯アリト確知シタルニ於テ

ハ其局ニテ前條ニ循ヒ其罪犯ノ吟味ヲ他局
ニ移シ為サシム可キトヲ公務ヲ以テ言渡ス
可シ

第四百九十五條〇若シ覆審院ノ各局合同シテ
訴ヲ吟味スル時前條ニ記スル如ク裁判役ノ
罪犯ヲ確知シタルニ於テハ民事局ニ其吟味
ヲ移シ為サシム可シ

第四百九十六條〇如何ナル場合ニ於テモ犯罪
申立書ニ因ルト否トニ管セス總テ全上ノ罪
犯吟味ヲ為ス可キ局ニテ被告人重罪ヲ犯シ

タリト告ク可キヤ否ヲ裁断ス可シ
其局ノ上席人ハ通常下吟味掛リ裁判役ノ為
ス可キ職務ヲ行フ可シ

第四百九十七條ノ前條ニ記スル局ノ上席人ハ
証人ノ申述ヲ聴ク事及ヒ被告人ヲ問糾ス事
ヲ別段指定メタル下吟味掛リ裁判役ニ任カス
丁ラ得可シ但シ其下吟味掛リ裁判役ハ被告
人ノ在リシヲバルトマニ又ハ別ル口ニテス
マニ外ノ者タル可シ

第四百九十八條ノ上席人ヨリ渡ス一昨ノ収監状

ニハ被告人ヲ入ル可キ獄舎ヲ指定ム可シ
第四百九十九條ノ前數條ニ記スル罪犯ノ吟味
ヲ為ス覆審院中ノ一局ハ被告人重罪ヲ犯シ
タリト告ク可キヤ否ヲ評議ス可シ但シ其評
議ハムケニ為ス可カラス又其裁判役ノ負數
ハ偶數タル可カラス
其裁判役中ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告
クルヲ可トセサル者^{多數}以上ナル時ハ犯罪申
立ヲ棄却スル言渡ヲ為シ月ロキユリユトルセ子
テ止被告人ヲ赦宥セシム可シ

第五百條の裁判役中ニテ被告人重罪ヲ犯シタ
リト告クルヲ可ナリトスル者半以上サル時
ハ其言渡ラ言渡ス可シ但シ其言渡書ニハ被告
人召捕ノ言渡ヲ附記ス可シ

此場合ニ於テハ其言渡書ニ指定メタル重罪
裁判所附ノ獄舎ニ其被告人ヲ移ス可シ

○第五百一條の前數條ニ記スル如ク覆審院ニテ
為シタル下吟味ノ手續ハ法式ニ準キタルニ
自キ取消サシト訴フ可カラズ
其吟味ノ手續ハ之ヲ被告人タル裁判役ト共

ニ罪ヲ犯シタル者ニ通シ用フ可シ但シ其者
裁判所ノ官吏ニ非サル時ト重氏亦同一ナリ
トス

○第五百二條の其他治罪法中ニテ此章中ニ記ス
ル規則ニ及セサル箇條ハ裁判役罪犯ノ吟味
ニ通シ用フ可シ

○第五百三條の覆審院中ノ一局ヨリ被告人ヲ重
罪裁判所ニ移シタル後被告人重罪裁判所ノ
裁判言渡ヲ取消サント覆審院ニ願出シタル
時覆審院中ノ刑事局ニ當テ其被告人重罪ヲ

犯シタリト告ク可キ旨ヲ述ヘシ裁判役アル

ニ於テハ其裁判役其取消願ヲ吟味スル席ニ

参ス可カラス第二百五十七條見合

然レ其再度取消願ヲ為シ覆審院ノ各局合同

シテ其願ヲ吟味スル時ハ如何ナル裁判役ト

魚氏其吟味ノ席ニ参スルコトヲ得可シ

第四章の官署ノ権ヲ慢侮スル罪

第五百四條の訟庭又ハ其他公ケニ吟味ノ手續

ヲ為ス場合ニ於テ未聴スル者稱賛誹謗ノ声

ヲ發シ又ハ如何ナル方法ヲ問ハス喧噪ヲ生

スルコトアル時ハ其裁判所ノ上席人又ハ裁判

役其者ヲ逐出サシム可シ若シ其者其命ニ抗

スル時又ハ一度裁判所ヲ出テタル後再々入

リ来ル時ハ上席人又ハ裁判役之ヲ召捕ヘテ

裁判所ノ獄舎ニ繫ク可キコトヲ言渡シ其言渡

ラ調書ニ記ス可シ但シ其獄監ハ其調書ヲ見

タル上ニテ其犯人ヲ受取り二十四時間獄ニ

繫キ置ク可シ

第五百五條の前條ニ記シタル喧噪ニ附加シテ

懲治刑輕罪又ハ警察違反ノ刑ノ註誤ニ處ス可

キ罪ヲ犯シタル時ハ裁判所ニテ其罪犯ヲ證
セシメタル上直チニ其席ニテ刑ヲ言渡ス可
シ但シ其言渡ヲ控訴シ得可キト否トハ左ノ
如シ

如何ナル裁判所ヨリ言渡シタルト虽凡警
察違反ノ刑ノ言渡ハ之ヲ控訴ス可カラス
又懲治刑ノ言渡ハ輕罪裁判所又ハ註誤裁
判役ヨリ為シタル時之ヲ控訴スルトヲ得
可シ

第五百六條の輕罪裁判所又ハ註誤裁判所ニ於
テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ此等ノ裁判所
ニテ其犯人ヲ召捕ヘシメ且其罪犯ノ調書ヲ
記シタル後書類ト犯人トテ重罪管轄ノ裁判
所ニ送ル可シ

第五百七條の覆審院上等裁判所重罪裁判所
吟味ノ席ニテ現ニ重罪ヲ犯シタル時ハ其裁
判所ニテ直チニ其裁判ヲ言渡ス可シ
其裁判所ニテハ證人ト犯人トテ問糾シ及ヒ
犯人ノ自カテ撰ミタル代言人又或ハ上席人ヨ
リ犯人ノ為ニ指定シタル代言人ノ申述ヲ

聴キハムケニ其罪犯ヲ証シ且其口キユリユトルゼ
子ラルレ又ハ其代役ノ申立ヲ聴キタル上ニテ
其犯人ヲ刑ニ處スル言渡ヲ為ス可シ但ニ其
言渡書目ニハ其言渡ノ旨趣ヲ附記ス可シ

第五百八條ノ前條ノ場合ニ於テ吟味ノ席ニア
ル裁判役五員又ハ六員タル時ハ四員以上ノ
投言アルニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カラズ
又裁判役七員タル時ハ五員以上ノ投言アル
ニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カラズ又裁判役八員以上タル時ハ其全員中四員三

以上ノ投言アルニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カ
ラス若シ缺数アラハ罪ヲ赦宥ス可シ

第五百九條〇アレヘリスウブレヘシヨメルカ
イ此ヲ輔佐行政警察官吏司法警察官吏其公
務ヲ行フニ當リ罪ヲ犯ス者アル時ハ第五百
四條ニ記スル如ク警察ノ職務ヲ行フ可シ但
シ此等ノ官吏ハ犯人ヲ召捕ヘタル後ニ罪犯
ノ調書ヲ記シ其調書ト犯人トヲ管轄ノ裁判
所ニ送ル可シ

第五章〇重罪輕罪註誤ニ付キ皇族及

高貴ナル官吏ノ申述ル證ヲ聽ク方法
勞五百十條○皇族高貴ノ職位ニ在ル者、裁判事
務執政ハ倍審ノ面前ニ於テ辨論ヲ為ス場合
ト雖モ証人トシテ之ヲ裁判所ニ呼出ス可カ
ラス、但シ皇帝訴ニ管スル者ノ願ニ因リ、又ハ
裁判事務執政ノ申立ニ因リ、別改命令書ヲ下
シテ、此等ノ者前ニ記列ヲ裁判所ニ呼出シ證
ヲ申述一シム可キ丁ヲ命シタル時、格別十
リトス
勞五百十一條○皇帝ノ命令アル時ノ外、前條ニ

記セシ數人上等裁判所所在ノ地ニ現ニ在ル
時ハ其上等裁判所ノ上席人其人ノ申述フル
所ノ証ヲ聽取テ之ヲ書面ニ記ス可シ、又其人
上等裁判所所在ノ地ニ在ラサル時ハ其現ニ
在ルアルロコングスマニノ下等裁判所ノ上席
人其証ヲ聽取テ之ヲ書面ニ記ス可シ
犯罪人ヲ吟味スル裁判所又ハ下吟味掛リ裁
判役ハ上席人ヲシテ証ノ申述ヲ聽カシムル
為メ罪犯ノ事件並ニ問目ヲ記シタル箇條書
ヲ其上席人ニ送ル可シ

其上席人ハ証ノ申述ヲ聽ク為メ、第一項ニ記
スル各人ノ住所ニ至ル可シ

第五百十二條〇上席人ノ記シタル証據聞取書

ハ、直下ニ之ヲ其上席人ノ在ル裁判所ノ書記
ノ出シ、又ハ其証ヲ聽クハ、求メシ裁判所
ノ書記ノ或ハ其旨ヲ求メシ下吟味掛リ裁判
役ノ在ル裁判所ノ書記ノ封印シテ之ヲ送
リ、此等ノ裁判所ノ書記ノヨリ、遅延ナク其書
ヲ「三」ムステ「ル」ビブリツ「ダ」ニ送ル可シ
其証據聞取書ハ、陪審ノ面前ニテ吟味ヲ為ス時

公法ニ陪審ニ讀聞カセ、被告人及ビ証人等ヲ
モテ之ヲ辨論セシム可シ、若シ此規則ニ背ク

時ハ、其聞取書ノ効ナカル可シ

第五百十三條〇若シ皇帝ヨリ第五百十條ニ記

スル各人ヲ陪審ノ面前ニ呼出ス可キトテ余
ハ、又ハ自カラ出席スルトテ許ルニシタル時ハ、
其餘令書ニ全上ノ各人證ヲ述フルニ付テノ
法式ヲ定ム可シ

第五百十四條〇裁判事務執政ヲ除ク外、総ラ

執政上尋、館吏、行政、權ヲ任セラルタル

參議官現ニ奉職スル將師外國政府ニ汎出シ
タル勞一等使節及ヒ其他ノ辦理公使ノ述ヲ
ル證ヲ聽クニ付テハ左ノ如クタル可シ

此等ノ官吏ノ現ニ在ル地ノ重罪裁判所又ハ
其地ノ下吟味掛リ裁判役ノ在ル裁判所ニ於
テ其証ヲ聽カシ必要ナル時ハ此等ノ官吏通
常ノ式ニ循ヒ之ヲ述フ可シ裁判所ニ出席シ
如ク証ヲ述フ
亦キ云々
又全上ノ官吏ノ在ル地ヲ管轄セザル裁判所
ニ於テ其証ヲ聽クニ必要ナル時陪審ノ面前

ニテ證ヲ述ヒシムルニ及ハサル場合ニ於テ
ハ其裁判所ノ上席人又ハ下吟味掛リ裁判役
ヨリ全上ノ官吏ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所
ノ上席人又ハ下吟味掛リ裁判役ニ証ヲ聽取
ル可キ罪犯ノ事件並ニ問目ノ記スル箇條書
ヲ送リテ其証ヲ聽カシム可シ

若シ外國政府ニ汎出シタル辦理公使ノ証ヲ
聽ク可キ時ハ前項ニ記スル箇條書ヲ裁判事
務執政ニ差出シ其執政ヨリ辦理公使所在ノ
地ニ其箇條書ヲ送り且其証ヲ聽ク可キ人ヲ

指定可シ

第五百十五條 ○前條ニ記シタル箇條書ヲ受取
リタル且席人又ハ下吟味掛リ裁判役ハ全上
ノ官吏ヲ己レノ面前ニ来ラシメ其述フル所ノ
証ヲ書面ニ記ス可シ

第五百十六條 ○其書面ハ之ニ封印ヲ為シテ其
証ヲ要スル裁判所ノ書記局ニ送ル可キト並
ニ之ヲ「ミ」ニステ「ル」ニ「ブ」リツクニ送ル
後ニ讀上ク可キト第五百十二條ニ記スル如
クツク可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其書面ノ

効ナカレ可シ

第五百十七條 ○第五百十四條ニ記スル官吏其
在ル所ノ地ヲ管轄セサル裁判所ノ陪審ノ面
前ニテ證ヲ述フル為メ其裁判所ニ呼出ヲ受
タル時ハ皇帝ヨリ此等ノ官吏其裁判所ニ出
ルヲ免ルス可キノ令ヲ下スルヲ得可シ
此場合ニ於テハ全上ノ官吏ノ述フル證ヲ書
面ニ記ス可ク且第五百十四條第五百十五條
第五百十六條ノ規則ヲ

第五百章 ○刑ヲ言渡サレシ後逃亡シテ忍

捕ハラレシ者ノ人違ヒニ非サルヲ認
ムル事

第百十八條○刑ヲ言渡サレシ後逃亡シテ召

捕一ラレタル者ノ人違ヒニ非サルヲ認ムル

コハ其刑ヲ言渡セシ裁判所ニテ之ヲ為ス可

シ
又流刑或ハ追放ノ刑ニ處セラレシ者其任ル

可キ地外ニ出テ召捕一ラレタル時モ亦前項

ノ事ニ等シク其刑ヲ言渡セシ裁判所ニテ其人違

ヒニ非サルヲ認メ且其罪外其任ル可キ地ニ相

當ナル刑ヲ言渡ス可シ刑法第百十七條第百

第百十九條○裁判所ニテハ口ヲキユリユルゼ

子ラレノ求メテ呼出シタル證人ト召捕ラ

レタル者ノ求メニテ呼出シタル証人ト問

亂シタル上陪審ノ立會ナクシテ前條ノ言渡

人違ヒニ非サルヲ言渡ヲ為ス可シ

人其言渡ヲ為スニハ公ケニ吟味ヲ為シ召捕ラ

レタル者其席ニ出ス可シ若シ此規則ニ背ク

時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第百二十條○口ヲキユリユルゼ子ラレ及ヒ召

捕ハテタル者ハ人違ヒニ非サルコトヲ認ム
ルニ付テノ言渡ヲ取消サント覆審院ニ求ム
ルコトヲ得可シ但シ其取消ヲ求ムルニ付テハ
此沿革法ニ記スル一般ノ法式ト期限トニ循
フ可シ

第七章〇裁判所ノ書類又ハ裁判言渡書
ヲ失ヒシ時其處置ヲ為ス方法

第五百二十一條〇火災洪水又ハ其他非常ノ事
ニ因リ未タ現ニ執行ハサル重罪又ハ輕罪ノ
裁判言渡書ノ正本ヲ失フタル時又ハ未決ノ

吟味手續ノ書類ノ正本ヲ失フタル時之ヲ取
戻スル能ハサルニ於テハ後ノ數條ニ記スル
如ク處置ス可キ

第五百二十二條〇裁判言渡書ハ公正ナル副本
アル時ハ之ヲ正本ト看做シ總テノ裁判言渡
書ヲ預カル場所裁判所ノ書ニ其副本ヲ出ス
可シ

之カ為メ總テ其公正ナル副本ヲ預カル官吏
又ハ平民其言渡ヲ為セシ裁判所ノ上席人ノ
命令書ニ循ヒ其副本ヲ其裁判所ノ書記官ニ

出ス可シ若シ之ヲ出サズル時ハ召捕一ラル
可シ
其公正ノ副本ヲ預カル者其上席人ノ命令書
ヲ示ス時ハ其副本ニ管係アル者ニ對シ既ニ
之ヲ裁判所ノ書記局ニ差出シタルノ證トス
可シ
其副本ノ預リ人ハ之ヲ書記局ニ出シタル上
無税ニテ其寫ヲ受取ルルヲ得可シ
第百二十三條○若シ重罪ノ裁判言渡書ノ正
本ヲ失ヒ且其公正ノ副本アラサル時陪審ノ

決断書ノ正本又ハ公正ノ副本アルニ於テハ
其決断書ニ據リ更ニ裁判言渡ヲ為ス可シ
第百二十四條○若シ前條ノ場合ニ於テ陪審
ノ決断書ヲ失フタル時又ハ陪審ノ立會ナク
シテ裁判言渡ヲ為シタル時輕罪ニ管スル場合其吟味
手續ノ書面ヲモ亦失フタルニ於テハ正本ヲ
モ公正ノ副本ヲモ失フタル書面ヨリ以後ノ
吟味ノ手續ヲ更ニ為ス可シ

味_二且之ヲ裁判ス可_レシ、訴訟法第百六十三條以下見合

第五百二十六條○二箇ノ上等裁判所、重罪裁判

所、輕罪裁判所、又ハ下吟味掛リ裁判役二員、同

時ニ一箇ノ輕重罪、又ハ相附ツキ帶キスニタル輕重罪

又ハ一箇ノ誣謬ノ吟味ヲ為シ始メタル時、此

等ノ裁判所、又ハ裁判役五ニ管轄ヲ受ケサル

者タルニ於テハ、覆審院ニテ其中ノ一ニ定ム

ニシ

第五百二十七條○又海陸軍ノ裁判所、陸軍警察

官吏及ヒ其他、總テ別段ノ裁判所トシ、上等裁判

所、重罪裁判所、輕罪裁判所、誣謬裁判所、下吟味

掛リ裁判役ト同時ニ一箇ノ輕重罪、又ハ相附

帶ニタル輕重罪、又ハ一箇ノ誣謬ヲ吟味シ始

メタル時ハ、亦覆審院ニテ其中ノ一ニ定ム可

シ

第五百二十八條○覆審院ノ刑事局ニテハ、願書

並ニ諸書類ヲ檢視シタル上ニテ、其總ノ旨ヲ

相手方ニ告知ス可キヲ言渡シ、又ハ直チニ

確定ノ裁判言渡ヲ為ス可シ、但シ直チニ確定

ノ裁判言渡ヲ為シタル時ハ、相手方其言渡ニ

付キ故障ヲ述フルコトヲ得可シ

第五百二十九條○被告人又ハ民事原告人ヨリ

數箇ノ裁判所中其一ニ定ム可キコトヲ願出シ

覆審院ニテ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キ

コトヲ言渡シタル時ハ其言渡書ヲ以テ双方ノ

裁判所ノコトニステールビエブリックニ吟味ニ管

シタル書類ト管轄抵觸ノ事ニ付テ其見込

書トテ差出ス可キコトヲ命ス可シ

第五百三十條○一方ノ裁判所ノコトニステール

ビエブリックヨリ二箇ノ裁判所中其一ニ定ム可

キコトヲ願出シ覆審院ニテ其願ノ旨ヲ相手方

被告人ニ告知ス可キコトヲ言渡シタル時ハ其

言渡書ヲ以テ他ノ一方ノコトニステールビエ

ブリックニ諸書類ト其見込書トテ差出ス可キコ

ト命ス可シ

第五百三十一條○二箇ノ裁判所中一ニ定メシ

トスル願ヲ相手方ニ告知セシムル覆審院ノ

言渡書ニハ管轄抵觸ノ生スル原由ヲ簡略ニ

記シ且路程ノ遠近ニ依テ諸書類ト見込書

ニ前

條ニ記

スル所トテ覆審院ノ書記局ニ差出ス可キ期

限ヲ定ム可シ
其言渡書ヲ相手方ニ送りタル時ハ、双方裁判
所ノ裁判言渡ヲも然止ム可ク、又重罪ノ訴ニ
付テハ、被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キノ
言渡ヲ為スヲ止ム可ク、若シ既ニ其言渡ヲ
為シタルニ於テハ、重罪裁判所ニテ倍番ヲ撰
ムヲ止ム可シ、然レモ原告及ビ被告双方ノ
權利ヲ保護スル此札置並ニ下吟味ノ手續ヲ止
ム可カラズ、
被告人又ハ民事原告人ハ、此篇第三卷第二章

第五百三十二條ノ願書ヲ出シタル上、覆審院ニ
テ直チニ其願ノ裁判言渡ヲ為シタル時ハ、覆
審院ノプロキエリエールゼ子ラルルヨリ、其言渡書
ヲ裁判事務執政ニ出シ、執政ヨリ之ヲ管轄シ
羅ラレシ裁判所ノ「」ニステールビュブリックニ
送ル可シ
其言渡書ハ被告人又ハ民事原告人ニモ亦送
達ス可シ

第五百三十三條。○被告人又ハ民事原告人ハ其言渡書ノ送達ヲ得タル時ヨリ三日内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ但シ其故障ヲ述フル法式ハ此篇第三卷第二章ニ記スル如クタル可シ

第五百三十四條。○前條ニ記スル如ク故障ヲ述一タル時ハ第五百三十一條ニ記スル如ク裁判所ノ裁判言渡力当然止ム可シ

第五百三十五條。○裁判所附ノ獄舎ニ繋カレサル被告人及ヒ民事原告人ハ管轄ノ相觸ルニ

双方裁判所中ハ一方所在ノ地ニ預メ住所ヲ擇ミ又ハ第五百三十三條ニ記スル期限内ニ住所ヲ擇マサルハ故障ヲ述フルヲ得ス

若シ此ノ如ク別段其住所ヲ擇マサルニ於テハ願人ヨリ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知セスト雖モ相手方之ヲ以テ口實ト為シ其願ヲ取消サレト述フルヲ得ス

第五百三十六條。○覆審院ニテハ管轄抵觸ノ事又裁判シタル上管轄ヲ罷テレタル裁判所ニ於テ是速為シタル吟味手續ヲ法式ニ協フタ

ルヤ否ヲ裁判ス可シ

第五百三十七條○覆審院ニテ二箇ノ裁判所中

一ニ定メントスル願ヲ受ケタル上其願ノ旨

ヲ相手方ニ告知ス可キコトヲ言渡シ其言渡書

ヲ法式ニ循ヒ相手方ニ送達シタル時ハ管轄

抵触ノ裁判言渡ニ付キ相手方ヨリ故障ヲ述

フルコトヲ得ス

第五百三十八條○二箇ノ裁判所中一ニ定メント

トスル願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キコトヲ言

渡シタル上ト相手方ヨリ故障ヲ申述シタル

上第五百三十九條ト問ハス覆審院ニテ管轄抵

觸ヲ裁判スル言渡書ハ以前ノ言渡書願ノ旨

ニ可キ言渡書又故障申述ノ前ト同一ノ法

式ニテ同スニ送達ス可シ

第五百三十九條○若シ被告人又ハヨシニステー

ルピエブリック又ハ民事原告人ヨリ輕罪裁判所

或ハ下吟味掛リ裁判役ノ管轄異ナリタルニ

因リ其吟味ヲ受ケサル旨ヲ述フルコトアリト

雖モ其申述ノ取上ヲ得タルト棄却セラレタ

ルトコト問ハスニ箇ノ裁判所ノ管轄相觸ル

ヲ以テ、其中ノ一ニ定ム可キ旨ヲ覆審院ニ訴
出ス可カラズ、但シ此場合ニ於テハ、輕罪裁判
所、裁判言渡又ハ下吟味掛リ裁判役、言渡
ヲ上等裁判所ニ控訴シ、又上等裁判所ニ控訴
シタル上、受ケタル言渡ヲ取消シテ、覆審院
ニ訴出スルヲ得可シ

第五百四十條〇一箇、上等裁判所、管轄内ニ
アル下吟味掛リ裁判役二員又ハ二箇ノ輕罪
裁判所ニテ、同時ニ一箇ノ輕重罪又ハ相附帶
シタル輕重罪ヲ吟味シ始メタル時、其上等

裁判所ニテ、此章ニ記スル法式ニ循ヒ、二箇ノ

裁判所中其ノ一ニ定ム可シ、但シ其言渡ハ之ヲ

取消サント、覆審院ニ訴出スルヲ得可シ

又一箇ノ輕罪裁判所、管轄内ニアル二箇ノ

誣誤裁判所ニテ、同時ニ一箇ノ誣誤又ハ相附

帶シタル誣誤、吟味ヲ為シ始メタル時、其

輕罪裁判所ニテ、其二箇中ノ一ニ定ム可シ、若

シ又二箇ノ誣誤裁判所一箇ノ輕罪裁判所、

管轄ニアル時、上等裁判所ニテ、其中ノ

一ニ定ム可シ、但シ此等ノ場合ニ於テハ、其言渡

其管轄同シ

據、取消ヲ覆審院ニ訴出スルヲ得可シ

第五百四十一條○民事ノ原告人及ヒ被告人ニ

箇ノ裁判所中、一ニ定メテトスル訴ヲ為シ

負訴訟トナル時ハ三百円ヲ過キナル

罰金ヲ言渡サルヤ可シ但シ此罰金中

其半ヲ相手方ニ渡ス可シ訴訟法第三百

第二章○此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味

第五百四十二條○重罪輕罪誣誤民事ニ付キ覆

審院ニテ、アロキユルルゼ子、ル申立、テ聽

キタル上、公ケ、ノ安寧、ノ為、ニ必要ナリト思フ

時、又ハ相當ノ疑ナル時ハ、此上等裁判所或ハ

重罪裁判所ヨリ、彼上等裁判所或ハ彼重罪裁

判所ニ吟味ヲ移シ、又ハ此輕罪裁判所或ハ誣

誤裁判所ヨリ、彼輕罪裁判所或ハ誣誤裁判所

ニ吟味ヲ移シ、又ハ此下吟味掛リ裁判役ヨリ

彼下吟味掛リ裁判役ニ吟味ヲ移スヲ得可

又被告人或ハ民事ノ原告人ヨリ同上ノ旨ヲ

覆審院ニ願出ルヲ得可ト雖、凡其願ハ相

當、疑アル場合、ミニ限ル可シ
第五百四十三條○被告人又ハ民事原告人
度裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役、面前ニ出
テタル上ハ其後相當ノ疑ヲ起ス可キ原由
生シタル時ニ非サルハ此裁判所ヨリ彼裁判
判所ニ吟味ヲ移サント願出ス可カラズ
第五百四十四條○相當ノ疑ヲ起ス可キ原由
ル時ハ目ニステルル。登ダ際ニ其吟味ヲ移
可キトテ直チニ覆審院ニ求ムルヲ得可シ然
レ目ニステルル。登ダ際ニ其吟味ヲ移

其事ヲ求メントスル時ハ先ツ其求需ノ書面
及ヒ其旨趣書ト憑據ノ書類トヲ裁判事務執
政ニ差出し執政其理アリト思フ時ハ此等ノ
書類ヲ覆審院ニ送ル可シ
第五百四十五條○覆審院ノ刑事局ニテハ願書
ト諸書類トヲ檢視シタル上ニテ直チニ裁判
言渡ヲ為シ又ハ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス
可キトテ言渡ス可シ但シ直チニ裁判言渡ヲ
為シタル時ハ相手方ヨリ其言渡ニ付テ故障
ヲ述ラレトテ得可シ

勞五百四十六條○若シ被告人又ハ民事ノ原告
又此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス可キ
ト願出シタル時覆審院ニテ直チニ其願ヲ
棄却シ又ハ取上クルノ言渡ヲ為ス丁適宜ナ
ラスト思フニ於テハ其言渡書ヲ以テ是迄吟
味ヲ為ス裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ノ
ニスラールビブルクニ其願ノ旨ヲ告知ス可
キト命シ且諸書類ト見込書トヲ差出ス可
キ旨又其コニスラールビブルクニ余ス可シ又
別段ノ道理アル時相手方ニモ亦其願出

旨ヲ告知ス可キト命ス可シ
勞五百四十七條○人コニスラールビブルクニ此
裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス可キトヲ
求メタル時覆審院ニテ直チニ其確定ノ裁判
言渡ヲ為ス丁適宜ナラスト思フニ於テハ覆
審院ヨリ其求メノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キ
トヲ言渡シ又ハ其他必要ト思料スル預審ノ
言渡ヲ為スヲ得可シ
勞五百四十八條○覆審院ニテ願書ト其他ノ書
類トヲ檢視シタル上直チニ其確定ノ裁判言

渡ヲ為シタル時ハ其言渡書ヲ「ブ」キユル
ゼ子ラルヨリ裁判事務執政ニ差出シ其執政
之ヲ管轄ヲ罷ノラレタル裁判所又ハ下吟味
掛リ裁判役ノ「ミ」ニステールビブルク「ト」被告
人及ヒ民事ノ原告人又ハ其住所ト「ニ」送ル可

茅五百四十九條○其言渡ニ付キ故障ヲ述ヘン
ル不^レ時ハ此卷ノ第一章ニ記スル規則ト期

茅五百五十一條○故障ヲ申述ヘタル時ハ訴訟
裁判言渡ヲ當然止ム可キ「ト」茅五百三十一條

ニ記スル如クタル可シ

茅五百五十一條○茅五百二十五條茅五百三十
條茅五百三十一條茅五百三十四條茅五百三
十五條茅五百三十六條茅五百三十七條茅五
百三十八條茅五百四十一條ノ規則ハ此裁判
所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス訴ニモ亦通シ
テ用フ可シ

茅五百五十二條○此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟
味ヲ移ス訴ヲ為シ一度其訴ヲ棄却セラレタ

此時ト雖比其後生シタル事件ニ付テ更ニ同

上ノ訴ヲ為スルコトヲ得可シ

六田下

古三十八

十止新書五百三十六

新書五百三十一

新書五百三十一

新書五百三十一

第六卷〇別改裁判所ノ事第九條至九百三十九年ノ國法第五十四條

至九百三十九年ノ國法第五十四條

下ニ因リ廢ス

第六卷〇國民ノ權利及之公ケノ安寧ニ管

第六百スル諸件一千八百八十年第十二月十六日決

定同月廿六日布告

第六百條〇重罪裁判所又ハ輕罪裁判所ノ書記

官ハ懲治罪ノ為メ禁錮ノ刑又ハ更ニ重キ刑

ヲ言渡サレシ各人ノ姓名、職業、年齡、住所ヲア

一七セノ順序ニ從テ別段設ケタル簿冊ニ書留
ム可シ又其簿冊ニハ各犯罪事件ト刑ノ言渡
トヲ簡略ニ書留ム可シ若シ書記官其書留ヲ
為サ、ルニ於テハ其波毎ニ五十ヲランクノ
罰令ヲ言渡サル可シ

第六百一條○書記官ハ三月毎ニ其簿冊ノ寫ヲ
裁判事務執政上國中警察事務執政トニ送呈
ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ百ヲランクノ
罰金ヲ言渡サル可シ
第六百二條○裁判事務執政並ニ國中警察事務

執政ハ前記ニタル所ニ等シキ大簿冊ヲ設
キテ置キ裁判所ノ書記官ヨリ送呈シタル簿冊
ノ寫ヲ書留メル可シ

第二章○通常ノ獄舎既ニ刑ヲ言渡サレ
テ輕罪裁判所附獄舎取調中ハ被告人
重罪裁判所附獄舎ノ事上

第六百三條○犯人ヲ刑ニ處スル為メノ獄舎ノ
外各アルロンダスマンレノ輕罪裁判所毎ニ被
告人ヲ入置ク可キ獄舎ヲ設ケ又重罪裁判所
毎ニ被告人ヲ入レ置ク可キ獄舎ヲ設ク可シ

第六百四條○裁判所附ノ獄舎ハ犯罪人ヲ刑ニ
處スル為メ、獄舎ヲ全ク相異ナシタルモノ
トス可シ

第六百五條○刑ノハ裁判所附獄舎ハ堅牢
ナル可キトト、並ニ清潔ニシテ、囚人ノ健康ヲ
害セサル可キトトニ注意ス可シ

第六百六條○裁判所附獄舎ハ獄監ハ刑ノ
ヨリ之ヲ任ス可シ

第六百七條○通常ノ獄舎及ト裁判所附獄舎ハ
獄監ハ簿冊ヲ設ケ置ス可シ



其簿冊ハ輕罪裁判所附ノ獄舎ニ付テハ、吟
味掛リ裁判役毎葉姓名ヲ手署シテ、且横線ヲ
畫シ、又重罪裁判所附ノ獄舎ニ付テハ、重罪裁
判所ノ上席人又ハ其上席人アラサル時ハ輕
罪裁判所ノ上席人毎葉姓名ヲ手署シテ、且横
線ヲ畫シ、又通常ノ獄舎ニ付テハ、刑ノハ、每
葉姓名ヲ手署シ、且横線ヲ畫ス可シ

第六百八條○收監狀、召捕ノ言渡書、犯人ヲ刑ニ
處スル言渡書ヲ執行ス可キ者ハ、被告人又ハ
犯人ヲ獄監ニ引渡ス前ニ、其獄監ヲシテ、其收

監状又ハ言渡書ヲ簿冊ニ登記セシム可シ但
シ其受取ノ証書ハ其收監状又ハ言渡書ヲ持
未リシ者ノ面前ニテ之ヲ記ス可シ
其受取証書ハ獄監ト引渡人ト之ニ姓名ヲ手
署ス可シ
又獄監ハ其受取証書ヲ寫テ引渡人ニ渡シ可
シ

第六百九條〇如何ナル獄監ト雖モ法式ニ協ラ
タル禁錮状又ハ状監状又ハ被告人ヲ重罪裁
判所ニ移ス言渡書又ハ施体或ハ禁錮ノ刑ニ

處スル言渡書アリ且之ヲ簿冊ニ登記スル
ニ非サレハ人ヲ獄舎ニ繋ク為メ受取ル可カ
ラス若シ此規則ニ背ク時ハ人ヲ枉ニ獄ニ繋
クノ罪アリトシテ訴ヲ受ケ刑ニ處セラル可
シ

第六百十條〇其簿冊ニハ受取ノ証ヲ記シタル
端ニ囚人ヲ赦宥シタル日附並ニ之ヲ赦宥ス
ル言渡書ヲ附記ス可シ

第六百十一條〇下吟味掛リ裁判後ハ其アルロ
シデスマン内ノ輕罪裁判所附獄舎ノ囚人ヲ

少クトモ毎月一度見介ス可シ
重罪裁判所ノ上席人ハ重罪裁判所附獄舎ノ
囚人ヲ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク毎ニ少クト
モ一度見介ス可シ
獄舎及ヒ通常ノ獄舎ヲ少クトモ毎年一度見
介ス可シ

第六百十二條○前条ニ記セタル見介外重罪
裁判所附獄舎又ハ輕罪裁判所附獄舎又ハ通
常ノ獄舎所在ノ

凡教育アル時ハ警察總督又ハ選卒長ハ必
モ毎月一度此等ノ獄舎ヲ見介ス可シ

第六百十三條○(千八百六十五年未七月十四日
左ノ如ク改ム)巴勒ノ警察總督又ハアレヘイ警
察總督ノ職ヲ兼子行フ都府ニ於テハ其ノレ
ハ山及ヒ其他ノ地ニ於テハメイル囚人ノ飲
食料十介ニシテ且健康ノ害タラサルヲ注
意ス可シ但シ此等ノ官吏ハ獄舎ノ警察ヲ掌
ル可シ
又下吟味掛リ裁判役及ヒ重罪裁判所ノ上席



人々下吟味ノ為メ又ハ裁判言渡ノ為メ裁判
所附獄舎ニ於テ執行ヲ可キ總テノ命令ヲ下
スルヲ得可シ

若シ下吟味掛リ裁判役囚人中ノ一人ニ付キ
他人ト接スルヲ禁スルノ必要ナリト思フ時
ハ別段ノ言渡書ヲ以テ之ヲ禁スルヲ得可
シ但シ其言渡書ハ獄舎ノ簿冊ニ登記ス可シ
○其禁ハ十日以上之ヲ為スルヲ得可カラスト
雖氏其期限ノ終リニ至リ更ニ改メテ之ヲ言
渡スルヲ得可シ○下吟味掛リ裁判役ハ其禁

ヲ言渡シタル旨ヲ告知スルキニ依リテ

告知ス可シ

第六百十四條○若シ囚人獄監又ハ其下役ニ對
シ又ハ他囚人ニ對シ暴行脅迫ヲ為ス時ハ
掛リ官吏ノ命ニテ更ニ嚴重ニ之ヲ禁錮シ又
ハ別ニ一人ノミヲ禁錮シ又烈シク暴動スル
時ハ手械足械ヲ加フ可シ但シ其囚人ハ暴行
脅迫ノ為メ別段刑ヲ言渡サル可シ

第三章○枉ニ人ヲ禁錮スルヲ制シテ

第六百十自由ノ權ヲ保護スル方法

第六百十五條○佛蘭西共和政治立國第八年

リメイ月ノ國法第七十七條第七十八條第

七十九條第八十條第八十一條第八十二條

循ト通常ノ獄舎又ハ裁判所附獄舎ニ非ル場

所ニ禁錮セラレシ者アルヲ知リタル人ハ

其旨ヲ治安裁判役¹ノ口キユ¹ルアルベリア

ル又ハ其代役下吟味掛リ裁判役上等裁判所

ノ口キユ¹ルアルベリア告知ス可シ

第六百十六條○治安裁判役¹ニス¹テール¹ビエ

ル諸官吏下吟味掛リ裁判役ハ自己ノ職

務ニ固リ又ハ人ヨリ告知ヲ受ケタルニ固リ

即時ニ枉ニ禁錮ヲ受ケシ者アル場所ニ至リ

其者ヲ自由ニ為ス可シ若シ之ヲ禁錮スルニ

付テノ正當ナル原由アリト述フル者アルニ

於テハ直ニ其禁錮ヲ受ケシ者ヲ掛リ裁判

役ノ面前ニ出テシム可シ若シ此等ノ官吏此

規則ニ背ク時ハ枉ニ禁錮ヲ為シタル者ノ同

罪人ナリトシテ訴ヲ受ク可シ

此等ノ官吏ハ前項ニ記スル處置ヲ調書ニ記

ス可シ

第六百十七條○前條ニ記スル官吏已ムヲ得サ

ル時ハ第九十五條ニ記スル法式ニ循ヒ言渡

書ヲ渡ス可シ即チ禁錮状引出状

若シ其言渡ノ如ク執行ノ時ニ當リ抗拒スル

者アル時ハ已ムヲ得ス他人ノカヲ借ル可シ

但シ其官吏ヨリカヲ貸ス可キ請求ヲ受ケ

シ者ハ其請求ニ從フ可シ

第六百十八條○若シ裁判所附獄舎ノ獄監又ハ

通常ノ獄舎ノ獄監其獄舎ノ警察ノ權アル官

吏ノ命令書ヲ持来リ親族或朋友者ノ請求ニ從ヒ其囚

人ヲ示スルヲ肯セス又ハ囚人トシテ他人ト被セ

シムルヲ禁スル命令書第六百十三條ヲ示ス

ヲ肯セス又ハ治安裁判役ノ獄舎ノ簿冊ヲ

示スルヲ肯セス又ハ治安裁判役ヲシテ其必

要ナリト思料スル簿冊ノ一部ヲ寫シ取ラシ

ムルヲ肯セサル時ハ枉ニ人ヲ禁錮スルノ

罪アリトシテ訴ヲ受ケ又ハ枉ニ人ヲ禁錮ス

ル者ノ同罪人ナリトシテ訴ヲ受ク可シ

第四章○既ニ刑ヲ受ケシ者ノ復權ノ事

第六百十九條○(千八百五十二年第七月三日左

第六如ク改シ施体又ハ加辱ノ刑又ハ懲治ノ刑
ヲ言渡サレシ者既ニ其刑期ノ終リ後又ハ
赦免状ヲ皇帝ヨリ犯人ノ罪ヲ得タル後ハ復権
ヲ願フコトヲ得可シ

第六百二十條〇施体又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレ

シ者ハ其赦宥ヲ得タル日即チ刑期ノヨリ五

年ノ後ニ非サレハ復権ヲ願フ可カラス其必

然レ氏民権剥奪ノ刑ヲ言渡サレシ者ニ付テ

ハ其言渡ヲ取消ス可カラサルニ至リシ日ヨ

リ其五年ノ期限ヲ算メ又其者禁錮ヲ言渡サ

レシ時ハ其禁錮ノ刑期ハ終止ヨリ其期

限ヲ算フ可シ

又政府ノ監察ヲ受ク可キ刑主タル刑トシ

テ言渡サレシ者ニ付テハ其言渡ヲ取消ス可

カラサルニ至リシ日ヨリ其五年ノ期限ヲ算

フ可シ

懲治刑ヲ言渡サレシ者ニ付テハ其五年ノ期

限ヲ減シテ三年トス

第六百二十一條〇施体又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サ

レシ者ハ五年以來一箇ノアルロシテスヤシ

内ニ住シ且其内二年以來一箇ノコトニシテ
其内ニ住スルニ非サレハ復権ヲ願フ可カラ
懲治刑ヲ言渡サレシ者ハ三年以來一箇ノコ
トニシテ其内ニ住シ且其内二年以來一
箇ノコトニシテ内ニ住スルニ非サレハ復権
ヲ願フ可カラス
第六百二十二條○既ニ刑期ノ終シシ犯人ハ復
権ノ願書ヲ其アルロンデスマンノプロキユリ
トルコトニシテ差出シ且左件ヲ申出シ
可シ

第一○刑ヲ言渡サレシ且附
第二○刑期ノ終リシ後才六百二十條ニ記
スル期限ヨリ更ニ永キ期限ヲ経タル時
其刑期ノ終リシ以來住シタル地
第六百二十三條○又其願人ハ既ニ裁判所ノ費
用並ニ其言渡サレシ罰金及ヒ償額ヲ拂フタ
ルノ誌ヲ立テ又ハ其者此等ノ金高ヲ拂フ可
キ義務ノ釋放ヲ得タル証ヲ立ツ可シ
若シ其誌ヲ立テサル時ハ法律上ニテ定ムル

所ノ期限間禁錮ヲ受ケタルハ証金高ヲ拂ハ
禁錮ヲ受テ立テ又ハ相手方其禁錮ノ手續ヲ
為スコトヲ拋棄シタルハ証ヲ立ツ可シ
又詐偽ノ分散ニ付キ刑ニ處セラレシ者ハ借
金ノ元利並ニ裁判所費用ヲ拂フタルハ証ヲ
立テ又ハ此等ノ金高ヲ拂フ可キ義務ニ釋放
ヲ得タル証ヲ立ツ可シ
第六百二十四條〇カロキユリユトハ五ペルテ
ハカウプレートヘトシテ願人住所ノコムミ
ニハ邑會議員ニ左ハ諸件ヲ証明スル為メ
會議ヲ為ス可キコトヲ命セシム可シ

第一〇願人コムミニ住シタル期限但
シ何月何日ニ其コムミニ住スルコト
ヲ始メ何月何日ニ之ヲ止メタルヤヲ附
記ス可シ

第二〇其コムミニ内ニ住シタル時間ノ
行狀

第三〇其時間生計ヲ營ミシ方法
邑會ニテ此等ノ諸事ヲ證明スル書面ニハ後
権願ノ法ニ過シタルヤ否ヲ知ル可キ為メ持

ニ之ヲ記シタル旨ヲ附記ス可シ
又「アロキユル」トル「アムベリア」ハ願人ノ住シ
タル「アムベリア」ノ「マイル」及「其カント」ニ
ノ治安裁判役並ニ「アルロンデスマン」ノ「スウ
ブレ」ト「ノ」説ヲ聴ク可シ

第六百二十五條○「アロキユル」エール「アムベリア」
止ハ左ノ書類ヲ受取ル可シ

第一○刑ノ言渡書ノ寫

第二○願人ノ行狀如何ヲ證スル禁錮場ノ

簿冊ノ寫

「アロキユル」エール「アムベリア」ハ總テノ書類

ト「見込書」ト「アロキユル」エール「アムベリア」

ニ送ル可シ

第六百二十六條○復権ハ願人住居ノ地ヲ

管轄スル上等裁判所重罪取ニテ之ヲ吟味ス

可シ

「アロキユル」エール「アムベリア」ハ總テノ書類ヲ其

上等裁判所ノ書記局ニ出ス可シ

第六百二十七條○其書類ヲ書記局ニ出シタル

ヨリ二月内、重罪取調局ニテ其願ヲ吟味ス

ゴロキユリニールゼ子^ル其申立書ヲ差出ス

可^シニ^テハ^テ其書^類ト^テ言^渡ス^ル可^キ也

裁判所ニテハ^テゴロキユリニールゼ子^テル^ル末

ニ從^ヒ又ハ其公務ヲ以テ更ニ改メテ其願

ノ趣ヲ取調^フ可^キヲ言渡ス^ル得^ル可^シ但シ

是レカ為メ六月以上遅引^ル可^カラス

第六百二十八條○重罪取調局ニテハ^テゴロキユリ

ニールゼ子^テル^ルノ申立ヲ聽^キル上ニテ其

見込書ヲ記^ス可^キ也

第六百二十九條○若シ重罪取調局ノ見込書復

権ノ願ヲ允許セサル^ル時ハ更ニ二年

ノ後ニ非サレハ再ビ其願ヲ為^ス可^カラス

第六百三十條○重罪取調局ノ見込書復権ノ願

ヲ允許ス^ル可^シト^モ詔^ル時ハ^テゴロキユリニ

ルゼ子^テル^ル其見込書ト^テ諸書類ト^テ遅延ナク

裁判事務執改ニ送呈ス^ル可^シ但シ其執改ハ嘗

テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニ相談ス^ル可^シ

第六百三十一條○皇帝ハ裁判事務執改ノ申立

ヲ聽^クタル上ニテ復権ノ願ヲ允許^ス又ハ棄却

ス^ル可^シ

白皇下渡權狀

第六百三十二條○皇帝ヨリ復権ノ願ヲ允許シ

タル時ハ復権狀ヲ渡ス可シ

第六百三十三條○其復権狀ハ嘗テ見込書ヲ差

出セシ上等裁判所ニ送ル可シ

又嘗テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニモ亦復権狀ヲ

公正ナル寫ヲ送ル可シ○其復権狀寫ハ刑

言渡書ノ正本ノ端ニ記入ス可シ

第六百三十四條○復権ヲ得タル者ハ嘗テ刑ヲ

言渡サレタルニ因リ失フタル權利ヲ全ク復

ス可シ

前數條ニ記スル規則ニ循ヒ復権ヲ得タルト

雖モ商法第六百十二條ニ記スル禁ヲ除ク可

カラス治罪法上ニテ復権ヲ得ルト雖モ商法

一度重罪ヲ犯シタル者ハ付キ刑ヲ言渡サレタ

ル後更ニ重罪ヲ犯シ施体又ハ加辱ノ刑ヲ言

渡サレタル者ハ復権ヲ得可カラス

復権ヲ得タル後更ニ刑ヲ言渡サレタル者ハ

復権ノ益ヲ得可カラス

第五章○プロセスタリプシノ事

第六百三十五條○重罪ニ付テノ裁判言渡書ニ

記スル刑ハ其言渡ノ日ヨリ滿二十年ノ時間
ヲ以テアレスクリアシテノ期限ナリトス
然レモ犯人ハ其重罪ノ為メ身体又ハ所有物
ニ害ヲ受ケレ者又ハ其者ノ宗系ノ遺物相續
人ノ住スル刑パルトマシ内ニ住ス可カラス
又政府ヨリ犯人ノ住居ス可キ地ヲ別段指定
ムルヲ得可シ

第六百三十六條ノ輕罪ニ付テノ裁判言渡書ニ
記スル刑ハ其終審ノ言渡ノ日ヨリ滿五年ノ
時間ヲ以テアレスクリアシテノ期限ナリ
トス但シ輕罪裁判所ヨリ言渡シタル刑ニ付
テハ其言渡ヲ控訴スルヲ得可カラサルニ
至リシ日ヨリ滿五年ヲ以テアレスクリア
シテノ期限ナリトス

第六百三十七條ノ死刑又ハ無期ノ施体ノ刑人
ハ總テ施体或ハ加辱ノ刑ヲ言渡ス可キ重罪
ニ付テノ刑事ノ訴及ヒ民事ノ訴ハ其重罪ヲ
犯シタルヨリ滿十年ヲ以テアレスクリアシ
テノ期限ナリトス但シ其アレスクリアシ
テ得ルニハ其十年ノ時間吟味ノ手續又ハ告

訴ノ手續ヲ受ケサルトテ必要ナリトス
若シ其十年ノ時間ニ吟味ノ手續又ハ告訴ノ
手續ヲ受ケタル儘ニテ其裁判言渡ヲ受ケサ
ル時ハ最終ノ吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ノ
日ヨリ滿十年ヲ以テ刑事ノ訴及ヒ民事ノ訴
ノアヒスナリトス其期限ナリトス但シ其
吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ニ全ク管セサル
人ニ付テモ亦同一ナリトス
第六百三十八條〇前條ニ記シタル二箇ノ場合
ニ於テ懲治刑ニ處ス可キ輕罪ニ管スル時ハ

滿三年ヲ以テ刑レヌクツテ其期限ナリ
トス但シ此期限ヲ算テハ前條ノ差
別ニ從テ可シ
第六百三十九條〇註誤ニ付テハ裁判言渡書ニ
記スル刑ハ滿二年ノ時間ヲ以テアヒスナリ
テ其期限ナリトス但シ其二年ノ期限ハ
終審ノ裁判言渡書ニ記スル刑ニ付テハ其言
渡ノ日ヨリ之ヲ算ヘ又終審ニ非サル裁判言
渡書ニ記スル刑ニ付テハ其言渡ヲ控訴スル
事ヲ得サルニ至リレ日ヨリ之ヲ算テ可シ

第六百四十條 ○ 誣誤ノ事ニ付キ為ス可キ刑事
ノ訴及ヒ民事ノ訴ハ其誣誤ノ罪ヲ犯シタル
日ヨリ滿一年ヲ以テアレルスクリア
限ナリトス但シ其一年ノ時間ニ誣誤ニ付テ
ハ調書ヲ記シ又ハ被告人ヲ召捕ヘ又ハ吟味
或ハ訴訟ノ手續ヲ受ケタルヲ問フテナク唯
其時間ニ刑ノ言渡ヲ受ケサルトテ必要トス
△
○ 若シ其一年ノ時間ニ控訴スルヲ得可キ始
審ノ刑ノ言渡アリシ時ハ控訴狀ノ送達ヲ受
ケタル日ヨリ滿一年ヲ以テ刑事ノ訴及ヒ民

事ノ訴ノアレルスクリア
第百七十
四條見合
ノ期限ナリトス

第六百四十一條 ○ 輕重罪及ヒ誣誤ニ付キ抗傳
レテ刑ノ言渡ヲ受ケル者既ニ其刑ノアレルス
クリア
言渡サレタル刑ヲ免レンカ為メ裁判所ニ出
ルキ及ヒ
第六百四十二條 ○ 重罪輕罪誣誤ニ付キ為シタ
ル民事ノ言渡相キ方ニ損失ノ償ハ之ヲ取消
サント訴フルトテ得サルニ至リシ時民法ニ

記スル規則ニ循ヒ其ノロススルノ期
限ヲ定ム可シ民法第千三百六
十二條以下見合

第六百四十三條〇此章ニ記スル規則ハ別段ノ
輕罪又ハ誑誤ニ付キ其訴ノ可レスカリプリ
シノ期限ヲ定ムル格別人規則ノ差支トナル
トナル可シ

佛蘭西
法律書
治罪法終

